# リステラス星圏史略
# 古資料ファイル
# ３－３－０
# （清峰 鋭 の 物語）

（発掘作業厨）

霧樹里守 is 土岐真扉

# 『　（無題）　』　（高校初期、だと思うが……？？）

『　（無題）　』　（高校初期、だと思うが……？？）
2006年7月27日 連載（2周目・大地世界物語） コメント (2)

角を曲がれば待ってるだろうか
ドアを開ければ行けるだろうか
近くて遠い　魔法の国へ
隣にあっても　見えない国へ

峠こえれば　行きつくだろうか
アーチくぐれば入れるだろうか
近くて遠い　地球の姉上
ぼくが暮らした魔法の国へ

いつか再び行けるだろうか
いつか再び会えるだろうか
ぼくが暮らした第二の故郷
ぼくが愛した　あの少女

角を曲がれば待ってるだろうか
ドアを開ければ行けるだろうか
近くて遠い　向うのこっち
一度訪れ　再び去った
二度と行けない　ぼくの故郷
ぼくが愛した　あの土地へ……

ひみつ日記
鋭の一人称詩（※歌詞。＜メロディもある♪）なわけですが、
『指輪』と『ナルニア』の影響下にあることは、

歴然としていますな……（笑）。

- PR -

## コメント

ヤマダシモン
2006年7月28日0:01
そして再び探せるだろうか
この道歩けばあるだろうか
終わりの奇跡を迎えた場所へ
だから歩こう　今日も　明日も
戻れぬぼくを導くのを
それが何かはぼくはしらない

って、感じのことを、この詩を詠んで勝手に考えてしまい、書き込んでしまいました。
久々に、想像力の根っこを掻き立てられました。ありがとう御座います。
ってことで、よろしく！

りす
2006年7月28日23:13
わ～い♪　書き込みありがとうございます♪　!(^^)!

しかし、「@ボリス」が付いてなくて、
しかも、カタカナなので、
一瞬間、「……だれ？」とか思ってしまった……（笑）。

# ＊創作メモ＊　2009年7月20日

＊創作メモ＊

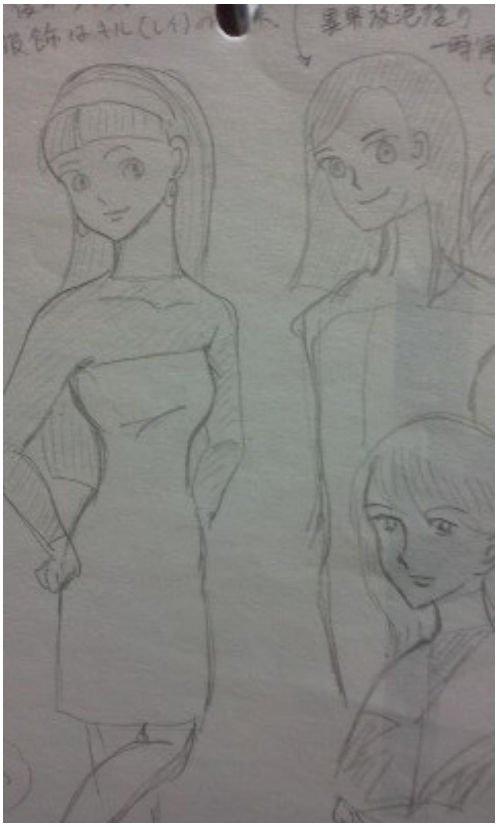
2009年7月20日 リステラス星圏史略　（創作）

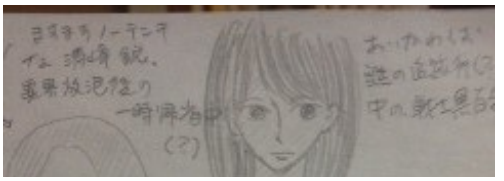
＊清峰鋭の物語①＝「暗黒童話」シリーズ最終話。

＊清峰鋭の物語②＝「大地世界物語・皇女戦記編」

＊清峰鋭の物語０＝「はじまる前の物語」所収「水の娘の物語」（仮題）

（万年少年☆）





（参照したければ資料）

↓

http://85358.diarynote.jp/201703092244412068/

鋭り…。

2017年3月9日 リステラス星圏史略　（創作） コメント (1)

# （　幼　少　期　）

# 『　（無題）　』　（@小学校or中学校）

『　（無題）　』　（@小学校or中学校）

2006年10月27日 連載（2周目・最終戦争伝説） コメント (1)

　昔々はるかな昔、僕がまだ本当に幼かった頃。そうあれは小学校の3年だ。孤児院にいた僕の所へ、緑色の護衛を二人つれて白い服の男が緑の服でやって来た。
その白い奴は妙に高圧な態度で院長先生を呼びつけて、話をしながら蛇そのものの目付でこっちをじろじろ見るんだな。
（あ、こいつは気に食わないな）
僕は一目でピンと来たよ。
だけどそいつが持って来た話は魅力的だった。

（前哨線）

『　　二、　』　（@たぶん中学1年の。）
2007年6月17日 連載（2周目・最終戦争伝説）

二、

　清峰鋭（きよみね・えい）は捨て児でした。
秋の終りの冷たく澄んだ朝、泣きもせずじっと空を見上げていた赤ん坊を、見つけてくれたのは院長先生です。
一目で混血児（ハーフ）とわかる顔だちと、貧しいけれど一針一針の細かい手縫いの産着の「A」の縫い取り。
利発そうな瞳をしているからと、てっとり早く頭文字に漢字をあてて、始め彼には鋭子という名前がつけられたそうです。無論おしめを替える段になって、慌てて下の一字は取り払われたのですが。
とにかく一目見て誰もが女の子だと信じ込んでしまう程の透けるような美しさと、理知的とでも言うべき瞳の光を持った、珍らしい赤ん坊ではありました。
　名前にふさわしく、彼が類い稀な高度な知能を持って生まれた事に周囲の人間が気づき始めたのは、彼鋭が小学校へ入学した頃でした。
入学時の知能検査でIQ300という数値がはじきだされた時にはまさかと笑って130の間違いであろうと考えていた大人たちも、どこで字を覚えたものか一年坊主が生意気に大人の新聞を読み始め、稚拙ながらもかなりまともな「見解」を熱心に話すようになった時、“これは！”と思ったそうです。
彼の興味は最初からもっぱら科学に向けられていたらしく、童話や絵本の変わりに難解なSF小説を読みあさり、近所の大学生の所へ入りびたっては、相対性理論やら万有引力やらを聞きかじって帰るようになりました。
彼の夢は科学者となり大宇宙船を建造する事。
そしてそれが災厄をまねいたのです！

　その男がやって来た時、園庭で鉄棒をしていた鋭は一目で不吉なものを感じとった。
それがどこから来るものだったか。
もしかしたらそいつの蛇のようなてらてらと光を反射させる眼に原因があったのかも知れないが、なにも世界中に蛇眼が奴一人しかいないわけではなし、わけのわからない異様な恐怖を感じた事の方に、かえって鋭は疑問を感じた。
　そう、何かを恐れる必要などありはしなかったのだ。
男は設立されたばかりの国立科学者養成センターの事務官の一人であり、IQ300という類い稀な知能を有している鋭を、全額支給の特待生という形で編入させたいと申し入れて来たのだ。

　願ってもないこと。
科学だけが目的の孤児である鋭にとっては、正に福音の鐘の調べのような話である。
否も応もなく鋭は承知し、
「では明後日。」
迎えをよこすと言って男は帰って行った。
鋭は降って湧いた幸運に日頃からの成人顔負けの冷静な洞察力を失ってい、帰り際に男の見せた不吉な笑いにも気づく事なく、ただ彼を我が子同様にかわいがってくれた孤児院の院長だけが、苦渋に満ちた青い顔をして凝っと額を押さえていた。

# 『 ティシール（仮題）』　（@中学2年～高校3年）

『　ティシール（仮題）　第1部　ティシール　（第2部・律子）　』　（@中学2年～高校3年のどこか☆）

2006年10月15日 連載（2周目・最終戦争伝説）

1．その男

その男がやって来たのは~~僕がちょうど小学校の4年生だった時の~~19××年の夏休み、7月31日のことだった。男は痩せぎすで、眼つきが変に鋭く、セミの声が一面にやかましいほど響きわたっている中でダークスーツの三つ揃いを着こんで更にその上から目が痛くなるほどのバリバリの白衣を羽織っている。
その一見して科学者か医学教授と解る男がボディーガードを従えて園の前の砂利道を歩いてやって来た時、鋭（えい）はちょうど門の前の木陰に店をひろげてハンドメイドのラジコンに挑戦していた。
無論、設計図から自分で引いたのだ。
「――きみが清峰 鋭 （きよみね・えい）君かね、坊や」
男が僕の目の前で立ち止まる。
「そうですけど」
「自分のIQを知っているかね、きみは」
「　　」
何か用かと鋭は云ってやりたかった。なんでこいつは僕のことを知っているんだろう、どこか気にくわないところのある人だけど。
しかし鋭は年長の者には礼儀正しくしなければいけないと~~園長先生に~~注意されたばかりだったし、はんだづけが一刻も気の抜けない所にさしかかったせいもあって、尋ねられた通りに大人しく園長先生の居所を教えて再びラジコンの方に注意を戻した。
鋭、~~清峰 鋭~~10歳。この時まだ小学校の4年生である。~~へその緒も取れるか取れないかという頃に雪の積もった門の前で拾われて、以来ずっとこの青光愛育園で育てられている。~~
一目見て欧亜混血児らしいと知れる美しい顔だちの子供である。真っ直ぐで素直な髪も、そっくり同じ色合いの瞳も、~~やわらかく明るい薄茶色、~~肌は少し陽に焼けて、内側から光が透けてみえるような淡い象牙色に輝いている。ただ、その表情だけはいかにも子供こどもした可愛らしさにはおよそ遠く、みごとなオデコやよく動く大きな目でさえが、見かけ以上に大人びている少年の頭脳的な性格の方をより一層良く表現していた。

数10分か、それとも1～2時間は経ったのだろうか。鋭が一段落終えてさあ川へ泳ぎに行こうと思いつつなんとはなしにぐずぐずしていると案の定園長室の方から奥さん先生が呼びに来て、何

か緊張した顔でお客さんの話を聞きに行くようにと告げた。
勘が当たったな、~~少年はそう思いながら――~~彼の予感はいつでも大抵的中するのだが――少年は漠然とそう思いながら敏捷に立ち上がり、散らばしたままの部品の山にちらりと一瞥をくれて落ちつかない原因へと歩きだした。
　雑木林の上に純白の積乱雲が盛り上がっている。____ゼミが泣き止んで、今は____ゼミがうるさく　　と騒ぎ始めていた。

「~~――さて。~~きみはきみ自身の能力を知っている。わしはきみの好みや考えを傾向として知っておるつもりだ。そこで――じゃ、つまらん前置きは抜きにするとしよう。
　きみは国立科技研究所について何か聞いていることがあるかね」
　案に相違して園長先生が席を外してしまっている部屋の中で、男は鋭が腰をかけるなり睨めつけるようにして話し始めた。
　「科技研――わしらは単に“センター”と称しておるが、数年前に設立されたばかりの国立科学技術開発研究所のことじゃ。これは世間にもあまり知られていないことじゃが、ただ国立と言うてもこれは政府の直轄になっておってな、設備資金面研究内容共にその充実度は他の弱小研究所群に較ぶべくもない」
　男――その話し振りから見かけよりははるかに年寄りであることが知れる――は続けてその科技研とやらの具体的なアウトライン、敷地面積・年間予算額等を列挙してみせたが、それは“他の弱小―”を知らない鋭にも容易にその秀度を理解できる内容を示していた。
研究所と云うよりは、むしろ何かの基地であると形容した方がふさわしい。
　「研究者にはどんな人がいるんですか？　僕は近所にいる大学生のおかげで普通の科学雑誌だけでなく各学会の会報なんかも良く読ませてもらっているけど、それだけの規模を誇る研究所にしては何の記事も見た覚えがないですね」
　仕付けられてきた通りに行儀よく腰をおろしている奇妙に冷静な眼をした少年が、やはり仕付けられた通りに丁寧な質問を返す。少し開いた膝の上にきちんと両手を組み、背筋を良く伸して、対峙している大の大人の尊大さにも負けない落ちつきぶりである。それでも一応興味を引かれてはいるのだろう、心持ち前に乗り出して、熱心に科学者からの答を待っていた。
　「わしらの予測通り、なかなかに抜け目のない性格のようじゃな」
　男が、それこそ抜け目の一片も無さそうな双眼を満足げに光らせる。
　「名を挙げてみたところで君は知らんじゃろう。指摘の通り、わしらは――左様、一般の学会とは殆ど関係を持たずにやっておる。何故なら我々の知識・技術は彼方と比較すべくもなく発達しておるし、“センター”の豊富な予算は他の研究施設との協同を必要とせん。多岐にわたる研究部門が相互に協力しあうこともできるしな。実際、“センター”がここ数年に仕遂げた業績を一般学会の輩が嗅ぎつけた日には、わしらは賞　よりもまず混乱と反論、　難と　　を受けることになるじゃろうよ。
それが何よりもまず　　という原始的な感情に基づいたものであることは疑うまでもないが。」
　~~「“センター”は、わしも含む30余名の独立研究者によって運営されておる。独立研究者は各々多~~

~~岐に渡る学識と研究分野を持ち、~~
　いつの間にか窓の外には積乱雲が発達し、一人の老科学者と一人の子供のいる清潔だが擦り切れた感じのする室内は薄暗くなりつつあった。
遠くで雷の音がしている。
　男は更に生物科学、原子物理学、宇宙工学等、《センター》における研究分野とその研究課題を説明し、概略が握めたかと尋ねた。「ええ」鋭はうなずく。
　「では本題に入ることにしよう。
　わしらは――つまり《センター》における主要な研究者たちの事じゃが――は、ここ数年各部門の共同研究として、心理学・電子工学・生化学などを基盤に教育科学とも云うべき新分野を開発しつつある。
今や理論的には9分通りの完成を見たと言ってよいのじゃが、未だ実験データが足らん。とりわけ高知能児における専門教育課程がどの程度効果を上げ得るかについての――な。それというのも、IQ250以上・指導者による早期教育を施されていない学齢以上12歳以下の子供、という条件にあてはまる者が、殆ど見つからぬからじゃ」
　男は話す間中ひとときも目をそらさずに鋭の表情を観察していたのだが、しばらく言葉を切って巧みに誘いをかけてみても少年からの反応は何ひとつ得られなかった。無論、その頭脳の卓抜さからして科学者の云わんとしている事を悟っていない筈がないのであるが、見事に自制し切って眉ひとつ動かさない。
~~わずか10歳の子供にして、これは恐るべき精神力だった。~~
　ややあって、少年はわずか10歳の子供とはとても思えない、奇妙に疲れ切ったような重々しさでゆっくりと立ち上がった。そのまま戸口の脇の、電気のスイッチの方へ歩いて行く。雷鳴がすぐ近くまでせまり、世界は暗く蒸し暑く耐え難い程になっていた。
　電気をつける。
　鋭は今、男に背を向けて立ちつくしていた。
　カッ！　と一瞬、部屋の外が青く白く輝やき、空気をつんざいて音が光を追う。
　「僕をモルモットにしたいというわけですか」
　美しいボーイ・ソプラノは、しかし震えたり怖えたりする気配もなく、むしろ悠然として事態を楽しんでいる感があった。「僕の方にメリットは？」
内心の動揺を　覚えた　のは老獪な科学者の方だった。
　「――ふん。~~……まず第一に、正規の科学教育が受けられる。それも最高・最新の内容と方法でじゃ。第二に、~~まず第1に、思うような結果が得られるか否かに関ず、わしらは十分な額を礼金として支払う気でいる。第2にきみは卓越した指導者陣の管理のもとで正規の科学教育をうけることができる。それも最新・最高の方法と内容でじゃ。加えて希望通りの実験成功が得られた場合には、きみは実験終了と共に、特に優れた研究者の一人として《センター》に迎え入れられる事になっておる。」
　「――……“正規の科学教育”ですか。あなたは僕の弱点をご存じなんですね。他の2つは後で考えることにするとしても」

苦笑しながら振り向いて鋭は言った。

~~「もう1つ質問をいいですか？　僕のことをどこで調べたんです？　僕はマスコミとかに名前が載るようなことはしてないし、学校の成績も申の上より上には行かないように気をつけてました。僕があなたの云う高知能児――そういって良ければだけど――だということをはっきり知っているのは、園の先生達とさっき話した近所の大学院生だけの筈なんです。」~~
~~「5月の――表向きは文部省主催ということになっている……」~~
~~「ああ、あのIQテストですか？　でもあれはちゃんと、113になるように計算して――……」~~
~~「手を抜くべきではなかったな」~~
~~男は、鋭の反応の早さを喜ぶような、憎むような、奇妙にゆっくりした言いまわしで一言云った。~~
~~「あれの出題と解析は実は《センター》によるものだったのじゃ。あれだけ明確な解答パターンは、単なる偶然から出てくるものではない」~~

「しばらく、考えさせて下さい」

男が無言のまま立ち去ってゆくと、先ほどの威厳はどこへやら、まだわずか10歳のか細く華奢な少年は全身の力が抜けてしまったかのように手近な椅子に座りこんだ。ドアの外で心配げな院長の声と横柄な――言葉こそ丁寧だがハナから相手を見下しているとはっきり解る――男の声とがなにやら言い交わすのが聞こえ、やがて二人の護衛を従えて帰ってゆくらしい気配。
~~雨が降り始めたようである。~~
それでも鋭は両手に顔をうずめたままじっと座り続けていた。
コンコン、と遠慮がちなノックの音。しかしドアを開けて入って来た院長の目に入ったのは、いかにも分別臭そうな顔にちらりと茶目っ気のある笑顔を浮かべて、
「どうぞ」と大人のように椅子を指し示す、いつもの通りの少年の姿だった。
「あの人と何を話してたんですか？」
「一週間したらまた来ると言っていた。来る気があるならそれまでに荷物をまとめておくようにと。鋭――きみは、行きたいのかね？」
「はい――たぶん。なんでそんな顔をしてるんです、院長先生まっ青ですよ」
「あの男は――その――何と言ったか、きみを連れて行きたいと言っていた施設の事を、“日本のNASAのようなもの”と表現していたよ……いや、それはともかくとして、わたしはきみを朝日ヶ森学園へ遣りたいと思っていた……。鋭、考え直してくれないかね……」
予想外な院長の態度に鋭はわずかにたじろいでいた。蒼白になった顔に、ほとんど悲痛とも云うべき表情を浮かべて話しかけてくる。
「朝日ヶ森……ああ、あの、全額免除の奨学制度があるとかいう学校ですか？　先生が昔、通ってた。でも、そこは確か文化系の授業が中心なんでしょう。僕――僕は、科学者になりたいと思っているし――そりゃ……でも……」

少年はもごもごと口ごもると下を向いてしまった。~~これは~~いつでも大人顔負けにきちんと話す彼にしてはとても珍らしい事だったが、なぜか怖えているとさえ思える院長にはそれに気づく余裕がないようである。
「それになぜ、“NASAのような施設”というのがいけないんですか？　NASAは宇宙開発にかけてはずい分進んでいるし、宇宙工学っていうのは僕が一番やりたいと思ってる分野です」
話をわざとそらすように口早にしゃべってしまうと、顔を背けるように立ち上がった鋭は「失礼します」とも言わずに部屋から出ていった。
廊下のつきあたりから一歩外へ踏みだそうとするといつの間にやら激しい夕立ちが降り始めていた。鋭はけぶりたっている雨をすかして先刻までいた門の脇の木立ちを見る。――どうやら、誰も鋭のラジコンの存在に気がついてはくれなかったようだ。きびすを返して自分の部屋へ戻る。
来月のお誕生会でプレゼントにしようと思っていたのだが、どのみち一週間では仕上がらないだろう。

古くなった蛍光灯がみすぼらしい調度類を照らしだしている。
院長は窓わくにしがみつき、声にならないうめき声で何事かつぶやきながら我を忘れてすすり上げていた。
院長夫人である“奥さん先生”が1人娘の三重子を抱いて静かに入ってきた。
今年3歳になる三重子の胸部には、たくみに整形された手術の後が3回分、薄桃色になってまだかすかに残っている。

。

マーリェ・エンゲル
レーニ・ポリシェ

能力開発研究所（→広辞苑）
＞　特殊能力開発研究所（特研）

独立研究者（30余）

# （　清瀬 律子 と 清峰 鋭　）

# （『旅立ちの類型』）

# 《センター》

# 『　3.　　夢　……　その1　』　（高校13年のどこか。）

『　3.　　夢　……　その1　』　（@中学2年～高校3年のどこか。）
2006年10月17日 連載（2周目・最終戦争伝説）

~~―from diary of Ei Kiyomine.~~
~~―8月1日~~
~~―AM7:05当地着。現在位置詳細不明。気候・走行時間から考えて北海道～青森あたりか。質問するが解答なし。平野もしくは広大な三角州と思われる。~~
~~―当着早々燎野さんと別れる。別れ際の態度不審。~~
~~―朝食AM7:27。味も素っ気もないが栄養価計算されている。朝食後、西谷一尋（にしや・かずひろ）に紹介される。僕専属のトレーナーorマネージャーもしくは「実験体No.7，Ei Kiyomine」の実験分析~~
~~―僕の監督のもとに~~

「うえ～～……」
日頃の躾の良さもどこへやら、あてがわれた個室に1人とり残されるやいなや鋭は服を脱ごうともせずにベッドの上へ倒れ込んだ。
「疲れた。めいっぱい疲れた。4km遠泳のがまだましだ。ウ～～～～～……」
人前での大人ぶった表情も全て放り出してしまう。
既に深夜に近い時限だった。あれから、朝食もそこそこに一日中、“健康診断”なる怪しげなものに狩り出されていたのだ。
（健康診断？　はっきり言って能力テスト以外の何物でもないじゃないか、人をバカにして）
ごろりと頭の下に手を組んで仰向けになりながら、この、年よりもはるかにませた判断力を持つ少年は考える。
見なれぬ精密機器類。指紋から脳波から眼底毛細血管に至る識別可能部位の厳密なチェック。IQや一般知識・科学的専門知識の審査はまあ許せるにしても、反射能力、運動神経、さらには一見、付き添い（コンダクター）風の男の世間話に見せかけた、性格・思想・深層心理の判定!!
鋭の気に障ったのは、むろん、そういった検査をされるという事ではなかった。そんなことはここ、得体の知れぬ組織“センター”へ来ようと決めた時から予測されてしかるべき事だったし、思ったよりはずっと扱いも丁寧だ。――鋭としてははなから非人格的なモルモット扱いをうける覚悟でいたのだから。
ただ、気にかかっているのは――……
（チェ、非科学的だ）
二日続きの緊張が育ち盛りの体をくたくたにしてしまったのだろう。鋭はそのままふっ、と吸

い込まれるように寝入ってしまっていた。
　その夜……

――リョーノ！　やっと会えたね!!

　遠くでの人の話し声が、深く眠り続ける鋭の心の中に響いて来た。

――待ってたよ、待ってた！　ずっとずっと……
――わりィ。遅くなっちまったよな。
　　目をつけられるのに時間がかかって。
――そんなこと！　きみは――来てくれた。それだけで十分だよ。
――なんだ、疑ってたのか？　ひでぇなァ、約束したろ。

　「う、ん。誰……」　鋭は淀みに捉われたままかすかに身じろぐ。
　「誰……」

――そう、だね。きみは、そうなんだよね。ホントに――
――あ、おい！　泣いてんのか？　おまえ――疲れてんじゃないか？
――うん。でも、もう大丈夫だよ。何があっても。きみが、いるから。

　きみが、いるから。そんなフレーズが、わけもなく頭の中をリピートする。

――さあ、あまり感傷にふけっていてもしようがないよね。
　　外のニュースを聞かせてよ。みんな、元気？　リーツはどうしてる？
――ああ。もっとも、おれもここ半月ほど会ってねェけどね。
　　ただ――おまえがいなくなってからあと、妙にあちこちに
　　緑衣隊どもがうろつきまわるようになってきた。
　　今のところ、大した事件にはなってないが……

　緑衣隊？　……知らず、妙に気にかかる言葉に、少年の意識はついに深い淵を離れて上昇を始めた。緑衣隊――……何かしら、妙に凶々しい、不吉で昏い単語。
　緑の――緑の服の――……

　しかし、鋭がまだ彼の肉体（からだ）の呪縛から逃れ切れずにいるうちに、こんな言葉がかすかに聞こえてきて、とだえた。

――待って！　誰か――誰かが、この“声”を聞いてる。
――なに……？　おまえの他にも心話のできる奴がいるの？
――違う……こんな感じ……今までなかった。

――敵、か?!
――ううん……違う……と思う……でも――……
――しようがねえな、とにかく黙ろうぜ。
　近いうちに直かに顔会わせる機会ができなけりゃ、俺の方で
　何とか口実つけておまえの居る所まで行けるようにするよ。
　あの白い棟だろ？　何階？
――2階……でも、無茶はだめだよ。
――わーってるって。じゃ、な。
――うん。じゃ……
――おっと。ちょい待ち、
――え？
――あーいしてるぜ、ティ。
――ばっ☆　……ばかっ！　っっっ
――……

「――……夢、か。」
　何がなし頬を染めながら、目覚めて鋭はそうつぶやいた。まだ最後の笑い声が耳に残っている。不可思議な夢――
　だが彼はまだ心理学にはさほどの興味を抱いていなかったし、フロイド式に夢判断を試みるには、育ち盛りの肉体の要求が強すぎた。
そして。
　かけた覚えのないモーニング・コールに無理矢理たたき起こされた時、少年の心は既に昨夜の夢を忘れてしまっていたのである。

　翌日からハードスケジュールな毎日が始まった。学習、学習、ひたすら叩き込まれるばかりである。食事と入浴以外、ほとんど常に何かを覚えさせられ続け（むろん睡眠時間にも）、日曜日などというものは与えられなかった。それが半月以上続き、鋭の他の数人の少年達もほぼ同じ状態におかれているらしく、友人ができるどころかほとんど口を利く機会すらない。彼らは皆一様に青白い表情をしてノルマを果たすのに追われ、子供らしい遊びの欲求も若々しい応用能力も、全てを封じこまれてしまっているようだ。
　ただ、鋭だけはその中で一人異彩を放っていた。

　~~その日からハードスケジュールな毎日が始まった。~~
　鋭の連れて来られた所は、ここ、国立科学技術開発研究所、こと《センター》の西端中央に位置する《教育・能力開発法研究棟》だった。北辺には心理・社会・情報・統計学関係の研究棟が並び、南方には医学、薬学、生体科・化学、外科技術関係、細菌学などの集中ブロックがある。比較的高い場所からは、中央部の~~南北に走る~~電子技術・工学系の地区をはさんで東半部を占める、地学・天文学・宇宙工学・原子物理学――big science 系の巨大施設が点在する、驚ろくほど広いフィールドを垣間見ることができた。
　土地は平盤で、北西はるかに丘陵地とそれに続く山脈がおぼろにかすんで浮かんで見える以外

、《センター》の敷地も、その周囲に広がる廣野も、ほとんどと言ってよいほど起伏がない。まったく狭い日本のどこにこうも単調な景観が存在し得たのか、晴れた日に荒原の南端に輝やく細い銀環はどうやら水平線らしい、と、社会の授業のたびに科学雑誌を開げていたことを悔やみながら少年は考える。

　鋭をはじめ、能力開発実験のモルモット兼《センター》のエリート候補生である子供たちは、3歳〜17歳くらいの総勢50人ほどだった。

うち30数名は比較的年のいったたくましい少年たちばかりで、宇宙・航空力学系の試験飛行士としての訓練。残りの10余人が科・化学者の卵、平均IQ220の高知能児である。規律~~と罰則に基くスパルタ式訓練で徹底した集団生活を営んでいるアストロノーツ・グループと違い、彼ら~~高知能児~~には完全なケース・バイ・ケース。個人指導主義がとり入れられていた。~~

　孤人（こひと）

In Japan，　there isn’t a history of rebolution(?).

Though，　Japanese can’t give up the mind what statesmen are so great.

# 『　4.　　姫　』　（高校1年）

『　4.　　姫　』　（@中学2年～高校3年のどこか☆）
2006年10月18日 連載（2周目・最終戦争伝説）

「個別指導における方法論と効果に関する実験はほぼ終了したので」
鋭（えい）の学習内容や生活スケジュールの設計とその効率の資料収集を担当している、まだ若い研究助手・西谷がある日そう告げた。「全生徒の教育進度のそろう来週初めをもって、集団指導制に切り換えることになりました。」
それは少年が《センター》へ着いてからほぼ丸1年たった頃で、その間に彼の知識と能力は驚くほどに増大していた。すでに並の大学生程度の課題なら何の苦もなくこなすようになっていたし、~~彼の興味にそったものとそうでないものと、2～3の独自の研究課題と研究室とが翌日から与えられることになっていた。~~それも普通の人間のようにある専攻課目についてのみ、というのではなかった。むろん、《センター》の優れた教育設備や個別に綿密に練られるカリキュラムの効果にも注目するべきだが、むしろ、少年自身の高いIQと超的な記憶力によるものの方が大きかっただろう。
そしてその一方、生まれつきよくしゃべる子供というのではなかった彼はますます無表情となり、抑制の利いた声で必要なことだけを話す――行儀の良さとよぶにはあまりに完璧すぎる傾向を強めていったのだった。
~~集団指導制への切り換えにあたって、スケジュール調整上1日の空白が生じた。西谷助手が何かしたい事はあるかと尋ねるので鋭は外出したいと答えた。　　ここへ来て以来、休日をもらったことがなかったのだ。~~
~~そこでその週の木曜日、少年は西谷につれられて初めて《センター》の外へ出ることになった。~~

「――あれがそうですの？　ドクター・嶋崎」
長い回廊の端にあるラウンジの中央に腰かけて少女が言った。
~~「ずいぶん線の細い　　……まだまるっきりの子供だわね」~~
「まだまるっきりの子供……！」

誰かに見られているように思って、歩きながら本を読んでいた鋭はふと顔を上げた。廊下の向うから数人やってくる、その先頭に立っている少女が無遠慮に彼を観察していた。
~~少女の歩き方はひどく真っ直ぐで高飛車に頸がもたげられ、比較的貧しくつつましい心の暖かい世界で育てられた鋭にとっては見なれないもので~~
少年もその無感動な瞳で少女へ視線を返す。少女の、くっきりと細い形の良い眉が心持ちつりあがり、白い陶器のような頸がくいともたげられた。一瞬間、2人の子供たちの間に火花が――そ

れとも砕けちる氷のかけらのような閃光が——飛んだ。
そうこうするうちに、2人は、長い廊下の中途に向きあって立っていた。
「……清峰 鋭？」
なおも子細に値ぶみを続けながら、少女は初めから相手を呼び捨てにした。
年のころは12・3歳。未だに女にならない透き通った体躯。顔だちはあくまでも白く、華奢、とか繊細という他に形容の言葉がない。
少し神経質そうに見開かれたすばらしく大きな漆黒の瞳。愛らしい、小ぶりの鼻。匂いたつような眉のあたり。——完璧、という単語をさえ想起させる、紅い、光沢のある、血の色の唇。
しかし、そのひとつひとつ全ての造作が完全無垢な“永遠の少女”像を具現するかのようでいながら、彼女にはどこか権高さ、なまめかしさ、といった似つかわしくないもののかげりがまつわりついているのだった。
もちろん、つややかにすぎるほど黒々とした髪を、大人びたクレオパトラ・カットにしていることからくる錯覚であったかもしれないが。
だがこの時、少年がそれらの事実に気がついたというわけでは無論ない。鋭が何をみ、何を感じ、何を考えて——あるいは考えずに——いたにせよ、それは決して彼の表面に表れはせず、ただじっと2つの淡い色の瞳で、頭半分ほど背の高い対峙する少女の眼を見かえしているだけだった。
「——ええ。そうです」
鋭は肯きながらゆっくり答えた。ゆっくり——慎重と言うべきかもしれない。完全に無表情と言っていいほどの、ポーカーフェイス。
少女は矢つぎばやに幾つか問題を出した。基準を大学生におくのなら比較的初歩ではあるが、正確な計算値が必要とあれば専門の研究者でも電子計算機の助けを必要とするだろう。
鋭はしばらく——実に1・2分の間——黙ったまま心持ち目を伏せていたが、やがて顔を上げると与えられた問に、正しく、与えられた順に、複雑だが整理された答を出しはじめた。
「——結構よ、全問正解」
少女がかすかに首肯しながら「妾は満足じゃ」といった態で云うと、頬にかすかな赤味がさして、初めて本当の愛らしさに近いものがその口もとに浮んだ。
だが、それっきりで彼女の少年に対する興味は失せたようだった。
「手間をとらせました、博士（ドクター）。参りましょうか」

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

鋭に対しては一言の挨拶もなく、ここ《センター》では最高の権力を握っている独立研究者——《センター》は一般の学界とは無関係に成り立っているので“博士（ドクター）”というのは単に便宜上の通称である——の1人と対当に肩を並べて、少女は廊下の反対端へと去って行った。後ろから、帽子の記章でそれとわかる個人の護衛の任につく緑衣隊員が足音ひとつ立てずに従う。
そのうちの数人——少なくとも2人——は、少女専属のボディガードとして配置されているらしか

った。
「清峰君。」
いつの間にか西谷が追いついて来ている。
「あの人は？」
鋭は目で後姿を追いながら一言尋ねた。
「彼女は――」
西谷、分厚い眼鏡をはずし、まっさらのハンカチでしきりにこすりはじめる。
「野々宮奈津城（ナツキ）といって、頭脳銀行の人工交配実験の第一号です。~~IQで云うなら清峰君と匹敵、~~数年前までここにいて一旦実家――と云えるかどうか、卵子提供者とその親族の事ですが――の方へ戻られたんですが、今度集団指導制に切り換わるのを機会にまた当分こちらで暮すつもりでいるようですね。ま、気まぐれな方ですから。昔わたくしも彼女のスタッフの一人でしたが」
「なぜ敬語を使うんです？」
「戸籍上、元華族の家柄の出ということになっていまして、ま、卵子提供者の夫の家、野々宮家自体は今では没落して見るかげもありませんが、まァ、それでも色々とあるわけですよ、上層部とのコネとか何とか。……あなたも今後顔を合わせることも多くなるでしょうが、ま、そう言うわけですから、くれぐれも態度には気をつけて――ま、清峰君ならもちろん余計な心配は必要ないでしょうが」
~~《センター》こと、ここ《国立科・化学技術開発研究所》　　は、表向きこそ国立で、裏を返せば更に根強く“国家”というもの（例えば防衛庁・JCIA※といった）が介入していたが、日本のおけるそういった機構のご多分にもれず、裏の裏では古（いにし）えの“お家”の力関係が依然としてものをいう所なのだ。（※　JCIA＝Japan CIA　）~~
拭きおえた眼鏡をかけ、西谷は左手で神経質に位置を直した。
窓の外には陽光が照っている。銀色無彩色の合理的な建物の中には、空調（エアコン）の低いうなりと人工照明が、年中無休で稼働を続けている。
鋭は一旦閉じた本を開き、低く声に出して呟きながら長い廊下を歩きはじめた。

院長・岡山一朗

姫小路宮子
野々宮飛鳥
野々宮奈津城（なつき）
　　無津城

「神無月に生まれたからナツキだそうよ。」

それはきつい眼ざし、というのでもなかった。
何かはるけきものを~~だけ、ずっと~~見つめつづけている者だけが
もつ瞳をかれはしているのだった。
人によってはそれを夢を見ているような、とも云ったが

# 『　4. 姫　（の続き）　』　（@高校1年以降～高校3年のどこか☆）

『　4. 姫　（の続き）　』　（@高校1年以降～高校3年のどこか☆）
2006年10月19日 連載（2周目・最終戦争伝説）

　緑衣隊――それは《センター》の警備や施設等の管理補修、肉体労働を全面的に請け負っている、ちょっと得体の知れない集団だった。
軍律厳しく、決して無駄な口を叩かず、音をたてない。隊員たちは一様に冷たく無表情で、身じろぎもせず《センター》のあちこちに歩哨として立っている姿は一種無気味でさえある。
帽子や胸の標識で、《センター》の広大な外縁部の警備、各建物内外の監視、独立研究者や視察官などVIPの護衛。3つのセクションにわかれている彼らの顔ぶれが時おり不意に変わるところを見ると、どうやら本隊は別の所にあって一分隊が任務の一環としてかわるがわる派遣されて来るにすぎないらしい。
　姫君専属の緑衣隊員が鋭を迎えに来たのは、その日の夕刻遅く、彼に与えられている個室で西谷と翌日のミーティングをしている時だった。
　自動扉を無断であけて、入って来るなりいんぎん無礼な無表情さで鋭に向って来意を告げる。気を悪くした西谷が今からでは明日のスケジュールに響くと不平がましく抗議したが、緑衣隊員がそれに注意を払わないばかりか最初から最後まで彼の存在そのものを無視し続けたので、インテリとして兵士を見下しているプライドをいたく傷つけられた。
　鋭はそんな西谷と男とを見比べてしばらくためらう風だったが、再度せかされると大人しく立ち上がって部屋から出てゆこうとした。
　「それでは」と西谷も神経質に眼鏡を押し上げながら立ち上がろうとすると、緑服の男は声も出さずに鋭い一瞥だけでそれを抑えてしまった。
　《センター》の内外は昼夜灯火つけっぱなしが普通だが、この《教育・能力開発法実験棟》南翼は、3・4階が収容されている高知能児（モルモット）たちの個室にあてがわれていたために、精神衛生上の観点からかなり照明の光量がおとされていた。と、言っても少年たちが夜間廊下にさまよい出る機会など、ほとんどありはしなかったが。
　「暗いですね。」
　ところどころにある頑丈で小さな窓から相互にかなりはなれている周囲の棟の不夜城ぶりをながめやって鋭が云うともなしにつぶやいた。完全防音で夜になると自動的にシャッターのおりてしまう自室からはわからなかったが、雨だ。
　~~「もうずい分長いことプラネタリウム以外で星を見ていないんです。前は毎日夜ぬけだして見てたんだけど、田舎でしたから」~~
　「坊や、なぜこんな所にいるんだ」
　突然、緑衣隊員である筈の男が低い声で激しく云った。
　「――え、」

だがしかし、廊下のはずれ、エレベーターの前には明々と人工灯がともり、そこには緑衣隊数人の常時いる詰所があった。エレベーターの箱の中にも、2人。そして1階まで降りてしまうと、すぐその前が目的地だった。
「あの……」
「ここだ」
男はある1室の前で立ちどまり、インターフォンを押して鋭の到着を告げた。即座に「おはいり」と少女の高い声が答える。音もなく自動扉が開く。
一歩、室内に踏みこむと、そこは殺風景な廊下とは全くの別世界だった。
冷たい色の壁と天井、色気もそっ気もない牢屋さながらの小さな窓こそ他の部屋と変わらない造りだったが、金属の床はぶ厚いじゅうたんで覆われ、カーテン、大きなタペストリーの壁かけ、木製の大机、天幕つきの寝台。天井には規制の照明の他に小ぶりだが、いかにも美しいシャンデリアが下げられている。まったく、ここへ来て1日2日でよくここまで改造できたと思うほどだ。
だが、それだけの金をかけていながら――いや大金がそそがれているが故に――一層、明るく照された部屋の中の一種ほの昏い空気は隠しようがなかった。
「藤井、おまえはもう下がりなさい。ドアの前で歩哨に立つといいわ」
巨大な長椅子の腕に投げやりに上体を倒して少女が云う。と、少女のそば近くに膝まづいて何かしていたらしい、大柄な緑衣隊員が立って部屋を出て行った。彼らが何をしていたのかは鋭にはわからなかったが、室内に漂うかすかな嗅ぎなれない原始的な匂いに気がついた時、少年を先導してきた男の眼に一瞬閉~~じられた。~~暗い光が宿った。
「ふふん。遠野、今さら何を驚くというの」
少女の細い眉が皮肉に吊り上がる。

夜を知らない部屋の中で、しかし腰かけている椅子と同じく深い真紅色の部屋着をまとうている少女の細~~い~~胴は背景に溶けこんでいるかのようだった。ただ四肢と顔だけが紅い闇の中に浮きあがって見え、ごくゆるく重ねられただけの前あわせから半分ほども露わになっている、胸の青白さとのコントラストがいっそ痛々しいほどだ。
少女はそこに何かの象徴であるかのように身を投げだしていた。
「遠野、お茶。クインマリー」
あいかわらず鋭という部外者の存在を無視してぞんざいに云う。命じられた大の男が黙ってカップをさしだすに至って、はじめて少女は上体を起こし、鋭に向きなおった。そうすると背すじが驚ろくほど真っ直ぐだ。
手にしたカップに遠野に言いつけてブランデーを入れさせながら、12歳の美少女・野々宮奈津城は驕慢に年下の少年を見上げた。
「座りなさい。座っていいわ。そこの椅子」
半ばカップの縁に紅い唇をつけそうにしながら、目だけで自分の正面の豪奢な肘かけ椅子をさし示す。少年が大人しくその指示に従う。

その間に少女はこくこくと紅茶を飲みほしてしまった。
「待っていたのよ清峰。わたし退屈しているの。何か話をして頂戴。」
「え……」
無表情な子供の顔に初めてためらいらしい動きが現われた。
「まったく。高知能とやら称する子供がずい分集まったというから“これは”と思って来てみれば、何のことはないどれも泥くさい専門バカばかり。わたしの質問に答えられた最年少のおまえ1人とは《センター》のレベルも知れたものだわね……さあどうしたの清峰、何か話せと云っているのよ！」
「何か、って例えばどんな……？」
小女王の短気さに、お相手役は心持ち首をかしげてあいまいな頬笑みめいたものを浮かべた。
~~「ここに来る前には、院の小さな子たちをあやさなくちゃいけなかったんで、童話やおとぎ話の類なら、たくさん知っていたけど……」~~
~~ドーワ？　と少女は聞き返してから1人肯いた。「ああ童話、子供向けの話のことね。……それでいいわ。早く話しなさい。」~~
~~結局のところ奈津城は暇つぶしの相手が入り用だったらしかった。鋭は2つ3つ童話や民話を話させられ、その後で理解不可能な彼女の文学・文化論をそれでも結構興味をもって行儀良く拝聴し、　初め奈津城は、少年が科学的な専門教育しか受けていないのを知ってだいぶ気分を害したようだったが、勝手に話し続けるうちに、~~

「何でもいいわ。そうね――おまえのことを教えなさいよ。」
「、僕のこと?!」
今度こそ、少年は、予想外――という表情を形造った。
「ええと」――はじめての間投詞。
「フルネームは清峰鋭、推定年齢で10歳です。推定――というのは、実は僕は捨て児なので――」
いかにもしにくそうに話しだすのを、奈津城はフン、という表情で邪険にさえぎった。
「知っているわよそれくらい。清峰鋭。sex、メール。19××年1月3日早朝、塔浦句県堅井中郡541-2、聖光愛育園門前にて発見さる……」
「調べたんですか？　知っているんならなんで尋くんです？」
「通りいっぺんの報告書の内容を読んだからっておまえを知っていることにはなりゃしないわよ。」
「？　すみません。言ってることが、解らないん――……」
「じれったいわね！」
まだ手にしていたカップが、鋭の肩先をかすめて背後はるかの壁にぶつかる音がした。
遠野、と呼ばれた例の緑衣隊員が黙ってそれを始末しに行く。
「狂暴なんですね」
恐れをなすでもなく、そう――心底“キョトン”として――少年が言うのに、奈津城は突然愉快そ

うに笑いだす、という形で反応した。
「アハ、アハハ、おまえ――面白い。とても面白い子ね！」
それからは話はわりあいにスムーズに進んだ。

× × ×

少年があくびをし始めているのに気づいて奈津城が許しをだしたのは、すでに11時を過ぎようとしている頃だった。

# （　ティシール と 遼野 の 物語　）

# 『　2.　　過程　』　（@中学2年～高校3年）

『　2.　　過程　』　（@中学2年～高校3年のどこか？）
2006年10月16日 連載（2周目・最終戦争伝説）

　1週間というものはあっという間に過ぎた。その間に鋭は自分で荷物を造り、部屋を片づけ、学校の先生と世話になった院生とにきちんとあいさつをしに行った。~~その~~どちらも《センター》というものの存在を聞かせられるのは初めてで、~~とりわけ鋭の天才に最後まで気づかなかった大の好い教師には~~鋭は自分の能力がどんな経路をたどって《センター》に知れたものか不思議に考えた。草深い地方の片すみにいるせいもあり、幸いマスコミ種になるような派手なマネをした事は一度も無かったのである。
院長は院長で、法律上の手続きとか称して妻と子を東京へやらなければならなかった。そのくせ彼は自分で市役所まで鋭の移転届を出しに行った。
　最後の日に愛育園の中でささやかなお別れ会が開かれ、窓を開け放った食堂にジュースとお菓子、わずかばかりの花を挿した花びんなどが並べられた。
子供たちも職員も、当然、話し好きの院長が「はなむけのことば」を一席ぶつものと期待していた。しかし、院長は気分が悪いといって部屋から出て来ようとはしなかった。
予定より早く例の男が緑の制服のボディガードを従がえて迎えにき、会は盛り上がらないままに解散となった。
　「これ。」
　「おちぇんべいだよ」
　「バッカ、おせんべつだろ」
　「体に気をつけて。辛い事があったらいつでも帰って来ていいのよ」
　「みんなでお金出して買ったの」
　ぎりぎりの瞬間に大きな紙袋が鋭の手に押しこまれ、口々の別れの言葉を少年はただ静かに肯ずいて受けた。
　園に続く小道の向う側に、小型バスくらいの大きさの~~緑色の~~ボディガードの制服と同じ色の車が待っていた。
　「囚人護送車みたいね」
　誰かが窓のないその型を評してつぶやく。
　「早く乗りたまえ、清峰君」
　男は鋭に後部ドアを指し示し、自分は前部のゆったりしたシートにおさまった。
　鋭が乗り込むすぐ背後で2人のボディガードが左右から扉を閉ざす。彼らが前部の運転台に納まる震動が伝わったかと思うと見送りへの挨拶も残さずに緑色の車は走りはじめた。

　（※緑色の「囚人護送車」の簡単なイラスト。）

背後からドアが閉じられるお急にひいやりし、ひっきりなしの蝉の声の途断えてしまったことが少年にかすかな異和を感じさせた。車内はそれこそ囚人護送車さながらの造りつけで、両脇に（つくりつけの狭くて低い）腰かけ。前半部とのしきりの壁についているひとつの他には――それとて非常に小さいうえにおそらく向う側からしか開けられない構造のようだが――窓もなく、紫白色の明るすぎる人工照明がスチールの床や壁に反射して、寒々とした非現実的空間を作りだしていた。
車が走り出してしまったので鋭はしかたなしに落ちつかなく手近かの椅子にかける。
しかし何よりも意外だったのはこの車室に既に先客が乗っていた事だった。
彼は鋭とは反対側のベンチの上にさも窮くつそうに横たわり、驚いたことには熟睡してしまっているらしい。今年9歳の鋭よりも確実に7〜8歳は上だろうか？　腕も脚も太く発達し、ケンカと云わずスポーツと云わず、反射神経の練度よほどのものであるだろう。~~ただその寝顔だけは未だに子供っぽい無邪気な気真面目さ、といったものをとどめていて、少し開いた口元の闊達ないたずらっ気などと共に現われつつある少年らしいはにかんだ優しさを~~　ただその寝顔だけは未だに子供っぽい熱心な／無邪気な？／誠実さ、といったものをいくらかとどめていて、口元の闊達ないたずらっ気と共に~~少年の乱暴さ、生年の荒っぽさ、といったものを~~　鋭に恐怖感を与えなかった。
「優しい野蛮人」――どこかで聞いた、そんな表現が思い出された。
車はどこか急な曲り坂にさしかかったらしい。幾度か左右にかしいだ挙げ句、特に激しくカーブを切った瞬間に、その少年はなにか寝言をつぶやきながら寝返りを打った。
「痛（て）っ!!」
「……うわ☆」
見事にころがり落ち、したたかに腰を打ったらしい。更に車の動きにつられて反動がつき、通路をころげて、鋭が座っている側のベンチの下に頭を突っこんでしまった。
「……あの、大丈夫……」
鋭が腰を浮かしかける途端、ガン、と鈍い音でベンチがゆれた。
慌てて飛び起きようとするあまりに頭上の障害物を失念したのだろう。こうなればもう、何をか言わんや、であった。
「ぐえ〜〜」
ところがそいつはようやくの態で椅子の下からはいだしてくると、もうけろりとした様子で、ひょいと元の席へ戻った。――あれあだけ手ひどくぶっつけたのに、こたえていないのかな……鋭はちょっと目を大きくして彼の顔を見つめる。と、彼の方でもまじっと視線を合わせてきた。
「ヨ、ご同輩。おたく男、女？」
「え？――なっ☆」　……絶句数秒……
「あ、わりーわりー、気ィ悪くしないでっっ」
彼は慌てて手を振ってつけくわえた。
「女の子だろーとは思ったんだ。ただあんまり髪短くしてるんでサ」

―――鋭はもう、潰れてしまいたい気分――……
「いや～～、美人だねェ、ホント。ちょっとボーイッシュなとこがまたかわいいよ。今度デートしない？」　彼は、本気であるらしい、どうやら。
「僕……男なんですけど」
――――――――――――――――――――――……
「‼――悪い。」
青年が素直に謝ったので、憤慨というよりはまだ唖然、呆然に近かった鋭の表情も、さして長びかずにいつものポーカーフェイスに戻る。が、「でも、おまえ、ほんっとーに美形だぜ。あと4・5年もすりゃ女も男も放っておかなくなる」――と彼があまりに悪びれずに続けるのを聞いて、思わず微かな笑みを浮かべてしまった。
「しつっこいんですね。でも、男もって、どいう意味なんですか？　――女の子みたいに可愛いい――とかは前にも云われたことがあったけど、面と向って間違われたのは初めてだし。第2成長期に入って体型が変わってしまえば、もうそんなことはないんじゃないですか？　それとも僕はそんなに女みたいな顔立ちをしていますか？」
「あっ、いやっ、そういう意味じゃない！　そういう意味じゃっ……っっ
ガキには通じない冗談なんだった☆　忘れてくれっ」
彼はひとりでジタバタと赤くなっている。
「……へえ、……」
鋭は心持ち片目をすがめ、唇をきゅっと結んだ。
~~慣れた人にしか解りはしないが、何か新しいものごとに興味をひかれた時の、彼の癖である。彼がわずかなりと表情を表すのは気の許せる相手に対した時だけである。~~
「ときに、オレ、燎野正明（りょうの・まさあき）。おまえは？」
「あ、僕は――……」
切り換え――と言おうか立ち直りの速いのがこの面白い人の特性らしいな――と頭のどこかでは冷静に観察しながらも、いつの間にか打ちとけた相互紹介に引きこまれている自分を発見して、鋭はためらいにも似たかすかな驚きを覚えた。

（「清峰 鋭 9歳」のイメージイラストあり。）

結局、好きな喰いモンは何かとか100m何秒で泳げるか――など他愛もないおしゃべりを続けるうちに鋭はすっかり相手に気に入られてしまい、幾度かちょっとした話題で議論した挙げ句、鋭の方でも青年の知性はかなりのものだと内心認めざるを得なくなった。

鋭がまだ9歳だと告げると燎野はひどく驚いたようだった。

何時間かが経ち、2度停車して鋭たちは用を足すために車から降ろされた。どちらもただのドライブインなどとは明らかに様子を異にしていた。2度目の停車の際にアルミパックの弁当がさし入れられ、いい加減しゃべり疲れた2人は黙ってもそもそとそれを詰め込んだ。弁当というよりは軍用の携行口糧に近く、鋭は初めその開け方が解らずに慣れた様子の燎野に教えられなければならなかった。

~~「　　今、何時ですか、燎野さん」~~
~~食べ終わってしばらくして鋭はそう尋ねた。既に夜の8時を廻り、3度目の小休止があって毛布を2枚、手渡されていた。~~
~~「車の揺れ具合いから推して、渋滞や何かにぶつかった様子ってありませんよね。ってことは、もうとっくに県境のひとつやふたつ、越えた頃だと思うんですけど……」~~
~~「そりゃ、だろうな。それがどうかしたン？」~~
~~燎野は早くも毛布をひろげ、寝る仕度を始めている。~~
~~「いえ。ただ、僕の越境届、自分で持っているんです」~~
~~「オレだってさ」~~
3度目のやや長い小休止で2人は毛布を与えられた。スイッチを探しあて、車内を薄暗くしてすぐに燎野は寝入ったらしい。
鋭は狭く固い長椅子の上で長い間、寝つかれなかった。夏の盛りの宵の口だというのに毛布一枚では肌寒くさえ感じる。

~~月光の中を、奇妙に目だたない色の車は静かに走り続けていた。~~
~~人気のない片田舎を縫う、一本の、白い細い道。アスファルトではなく、ただのコンクリとも、見えない。一本の道。~~
~~その道に沿って、えんえんと幅広の草地が続いている。~~
~~その意味するものを、まだ、誰も知らない。~~

×　　×　　×

翌朝、目覚めると目的地に着いていた。考えてみると鋭はそこが何処であるのかを知らない。――車内から一歩踏みだすと涼しく、真っ青な空がどこまでも広がっている。
「あばヨ」
軽く片目をつむると燎野はあっさりと離れて行った。

昨日の親しさが嘘のような――……鋭は何かそぐわない感じで、ボディガード達に伴われて去って行く後ろ姿を見送る。
「来たまえ清峰君。こちらだ」
例の男が少し離れてから呼びかける。　「はい」
少年は無表情に振り返り、ついて行った。

ティシール　／　ティシーレ　／　ティシーリア
レティシーレ　／　レティシーリア　／

燎野正明

真汝

沙姫子
冴夢
冴子
~~沙貴子~~
砂貴子

そう――「わたし／ぼく」は出られる。

※「檻の中の自由（ティシール）」のイメージイラストあり

# （　清峰 鋭 と 有澄 真里砂　）

# 『　序章　一、　』　（@たぶん中学1年の？）

2007年6月16日 連載（2周目・最終戦争伝説）

　序章　一、

　深夜、満月の晩。
人間言う所の妖精の輪（フェアリー・リング）に繰り広げられる饗宴の、お祭り騒ぎの中央ややはずれ、一つの大きな車座の一環に、真里砂（マーシャ）は歌い、手を打ち、笑いさんざめきながら座っていました。
なにも世間一般には普通の人間で通っているところの連中が彼女の他に混じっていないわけではなく、それどころか同じ朝日ヶ森学園の仲間たちなど一人二人に限らず、（全地球的に見れば）かなりの高率でまぎれ混んているに違いないと彼女は踏んでいたのだが、それでもやはり誰かにその場を目撃されたとしたら、
「気が狂っておりました。」
以外思いつける言いわけはなかったでしょう。
けれど無論、彼女はそんな事を心配してはいなかったのです。
なぜか磁石（コンパス）の利かない人跡稀な大森林。
とりわけ険しい山崖に囲まれて、自然の力で十重にも二十重にも注意深く隠されているからこその集会場です。
仲間、友人、もしくは味方でも客でもない人間に発見される可能性は万に一つもありませんでした。
　あかあかと篝り火は燃えさかり、虹の火花の尾を引いて、極彩色の虎が天空高く駆け上りました。
それを追うかのように別の一角から極楽鳥が舞い上ります。
魔法の大家たちが、余興にとその技を一部披露し始めたのです。
青い帽子に銀のスカーフを身につけた、かの老魔法使いの姿も見られるようでした。
夜空が彩られる度に、気のいい野次と、嘆息と、掛け値なしの喝采が上がります。
森の彼方の小さな街（まち）に、もしまだ起きている人間がいたとしたら、雲一つない星だらけの空の、小さな雷ほどにも見えるのでしょうか。
だれかが舞い装束の真里砂を描きだして見せたので、返礼に彼女は、その術の主の頭上に銀の流星を十ほども降らせました。
　その流星の最後の一つが地面に落ちて、青色のほっそりした草に姿を変えた丁度その時です。
真里砂の脳裏、心の奥深くに、誰かの救けを求める声が響きました。
その声を捕えた途端――本当に瞬間的にです――真里砂と彼との間になにか火花が飛び交うようなものが感じられ、全てがまだ真里砂の思考には理解も吸収もし得ない広漠さと速度をもって一

回転してしまったようで、咄嗟のうちに彼女は彼を引き寄せていました。
　いきなり目の前の空間に現われ出た人物に皆は騒然となりました。
年の頃十二・三の、真里砂と同年代。
一見して黄白混血とわかる顔だちと、日本人にしては明るい髪の色。
包帯がわりに巻かけた血に染まったシャツの切れ端が痛々しい大腿。
飢え渇き疲弊した青く冷えきった体――。
　誰？
　誰だ。
　この少年は誰!?
すぐさま、その場を取りしきる立場にある、不思議の長老たちが中央に歩み出て来て声高に呼ばわりました。
「静かに。皆静かにしてくれ！　この者をここに呼び寄せたのはだれ。この少年は何者？」
「私です。」
真里砂は立って素直に前へ出てゆきました。
「突然の非礼おわび申し上げます。救けを求める声が聞こえたので咄嗟に呼び寄せてしまいました。いったい誰なのかは存じません。――フィ。」
彼女は振り返って呼ばわりました。
「すみません。この人が危険と感じているものが何なのか、教えてもらえませんか。

　　フィ――フィシス。

フィと呼ばれたその女性は、足もとまでも長く流れる緑の髪をひいて盲いた瞳で横たわっている少年のそばへ歩り寄り、ひざまづいて、すっ、とさしのばした両手の平を、ぴたりと彼の額に押し当てました。
「……（キ・ケ・ン……）」
少年の頭から読みとれる、きれぎれの思考の断片が、低い少女の声で語られました。
「（見ツカリタクナイ）……（見ツカレバ、記憶ノ消去）……（洗脳・科学者養成せんたあ）――（やつらハ人間ジャナイ）。」
フィは立ち上がると、出て来た時と同じように静かに人の輪の外へ戻ってゆきました。
事情の飲み込めた者（主として混じっている人間たちですが）たちの間に低いざわめきが起り、長老たちが再び真里砂の方へ向き直りました。
（……で？　どうするつもりですか？）
真里砂は考える時の癖で少し右の眉をつり上げていましたが、すぐに
「……呼び寄せた以上、わたしには責任がありますし……それにどうやら、どのみちわたしの仕事のようですから。」
それだけ言うと一礼して、少年の体を負い上げて歩き出します。
有難い事に少年の体は思ったより重くなく、真里砂は楽に歩く事ができました。

はるかに年上の友人たちと別れの挨拶を交わし、草地を横切って岩まで来る頃には、背後では再び歌と踊りが始まったようです。
ひとまず少年の傷の手当てができる泉の所まで歩くつもりで、12歳の美少女は慣れた足つきで真暗な地下道の中へ降りてゆきました。

（☆「人間言う所の妖精の輪」と、「魔法の大家たち」だの「青い帽子に銀のスカーフを身につけた、かの老魔法使い」(^^;)”……たぶんこのフレーズが出て来るということは、甲斐悠紀子の『フェネラ』を読んだ直後で、英文直訳体である「～ところの」を習ったばかり、くわえて既に『指輪物語』の影響下にもある……、中学1年後半（二学期以降）時点の原稿です……☆　A^-^;)”　）

# 『　　一、　』　（@これも中学1年？）

『　　一、　』　（@これも中学1年？……だと思うが……）
2007年6月19日 連載（2周目・最終戦争伝説）

一、

　遂に鋭（えい）は力尽き、深い森の中で意識を失ってしまいました。
暗黒よりもさらに深いかと思われる闇があたりを押し包み、左腕（鋭は左利きです）の銃創を縛った布からさらにあふれ出した赤いものが小さな流れを作ってゆきます。
鋭にはもう、規則正しく一定の間をおいて命がしたたり落ちてゆくかすかな響き以外、何も感じとることができませんでした。
　手も足も痺れて冷え切って、体の自由が利きません。
先程までの豪雨を否定するかのように、森はこの上もなく深く沈黙し続けています。
（――今夜一晩。）
言葉に現れない意識の奥底で鋭は思いました。
（明日の朝には確実に、僕は冷たくなっている。）
　胸の方で、何かかすかなおき火のような存在が、それでも生きたい生きたいと懸命にもがきたてているのを、鋭自身は静かに見つめていました。
“死”はなぜか恐しくはなかったけれど、それでもやはりこんな所でたった一人、濡れた草の上に体を投げだしたまま古くなった雑巾のように冷たくなっていくのを待っているのは、たとえようもなく哀しい事でした。
なぜ、こんな所で、たった一人で―――。
それを思うと、鋭の見開かれたままの瞳からつつつと涙がこぼれました。
体の心も冷え切っていて、それと同じように冷たい冷たい涙でした。
　（生まれてすぐに親にさえ見捨てられた僕だけど）
（それでも友達がいた。先生達がかわいがってくれた。結構幸せに暮らしていたのに）
ナンデコンナコトニナッタンダ。ナンデ。
――鋭の心が一枚の傷ついたレコード板になって、ぐるぐる同じ質問の上を走り続けて行きます。
（初めて憧れた優しい女の先生だっていた。
　人よりずっと大きな夢を持っていて、
　どこまでも追いかけてゆくはずだったのに）
ナンデコンナコトニナッタンダ。
　鋭は実の所まだたった12歳の少年でした。
幼ない頃いつもおんぼろプレイヤーにしがみつくようにして聞いた、あのすり切れたレコードの中の小さな子守り歌を、

（死ぬ前に一度っきりでいいから）
――どんなガラガラ声でも構わない。生んでくれた母の声で聞きたかったと、長い間ごまかし続けて来た想いを今鋭は素直に願いました。
　やぶや下枝をかきわける、かすかにガサガサいう音がした時も、鋭にはもう聞きとるだけの力がありませんでした。
いつの間にか彼の目の前に、白いぼうっとした優しい人影が立っていました。
鋭は残された最後の力で泣きそうにかすかに微笑み、さしのべるつもりで傷のない方の右腕をわずかに持ち上げました。
「うれしいな。迎えに来てくれたの、母さん……？」
そうしてそれっきり、鋭の意識はふっつりと途切れてしまいました。

鋭は残された最後の力で泣きそうにかすかに微笑（ほほえ）み、さしのべるつもりで傷のない右腕の方をわずかに持ち上げて、
「うれしいな。迎えに来てくれたの。母さん……？」。
そうしてそれっきり、ふっつりと意識が途切れました。

　鋭は幾晩もうなされ、うなされて、意識の深みの泥沼にひきずりこまれ、また浮かびあがり、そんな風にしてかすかに目を開く度にのぞきこんでいる白い顔を意識しました。
その白い顔は自分と同じ年頃の風変りな顔dちの美しい少女で、不思議な事に豊かな緑色の髪で縁どられています。
鋭は夢現の中で、その少女が見た事もない生みの母か、さもなければ血を分けた姉か妹ででもあるかのように感じて、苦痛が走り抜ける度に救いを求めてその少女を呼び続けました。
　少女は始め鋭の体の脇にぴったり沿うように横たわって、冷え切った少年の体を暖めました。体に熱が戻り、ほとんど瞬間的にそれが高熱にうかされる状態に変わると、今度は枕辺につききりで汗をぬぐい、額を冷やし、たまに姿が見えなくなったと思うと、次にうっすらと気づく頃には薬湯や冷たく冷えた何かの液体を用意して、再び心配そうな優しい瞳を鋭の方へ向けているのでした。

　車のエンジン音が聞こえたような気がし、重い扉の開く音と男女の静かな話し声があたりの静けさに波紋を投げかけました。

（未完）

# 『　　三、　』　（@たぶん中学1年の。）

『　　三、　』　（@たぶん中学1年の。）
2007年6月18日 連載（2周目・最終戦争伝説） コメント (1)

三、

「……ふう……ん」
真里砂が、やや上を向いた上唇に右手親指をくわえこむようにし、目線を斜め下方向に投げやってつぶやいた。
「じゃ、あなたが機密回線（シークレット・コード）で捜索命令の出ていたエイ・キヨミネなのね？――あら！」
本名を呼ばれてぎくりと体を起こそうとした鋭を見て、彼女はくすり、と笑った。
「ご免なさい。別に驚ろかすつもりではないのよ。」
「――なんでだ!?」
はね起きようとしたところを、その細い見かけによらず力の強い腕で押し返されて、鋭は首だけカマキリのように持ち上げてすごい形相で尋ねた。
「なぜ君が緑衣隊の機密命令（シークレット・メッセージ）の事を知ってるんだ！」
「緑衣隊やら何やらの事ならあなたよりよほど詳しいわ。なぜ知っているかと言うと、――だめね。今はまだ話せない。あなたをどの程度まで信用していいものか解らないもの。」
「あー、わかったよ命の恩人殿！ひとには洗いざらい話させといて―――」
「ストップ！」
わめきたてようとする鋭を真里砂が手をたててさえぎりました。
一瞬静かになると、かたわらの泉の音が急に大きく聞こえます。
遠くで鳥たちが鳴き、小さな草地の上を昇り始めた朝の光が金緑としずくの銀青色に染めわけていました。
「あんまり興奮するようだといくら待っても回復しないわよ。わたしの事について言えばあなたに話す義理はないんだし、あなたは助けられた立場上、わたしに必要な情報を提供する義務があります。それから後なら、あなたが今後どうしたいのか言ってくれれば、できる限りの便宜を計るわ。」
「ひでえや恩の押し売りだ。あ～あ、またとんでもない奴に助けられちまったもんだなあ」
言葉とは裏腹に、まんざらそうも思っていないくちぶりで鋭がぼやきました。
連日の命がけの逃避行の後に、昼寝の夢のような穏やかな時間が不意に訪れたもので、彼はすっかりくつろいで見ず知らずの少女を全面的に信用する気になっていたのです。
鋭の気持ちを感じとったのか、真里砂が真珠色の歯列をのぞかせてニッと笑いました。
「ねえ、何だか初めて会ったんだという気しないわ。」
「あれ、僕もだよ。既視感（デジャ・ヴュ）てやつかな？――で、何？情報……？」

「ええ、そうなの。」
真里砂が急に真顔になってうなずきました。
「ねえあなたが10月7日まで科学者養成所（センター）に居たと言うのだったら……。ルディ・遠藤と言う人を知らないかしら？」
「ル・ルディの事かい!?」
三度目の正直で今度こそ鋭は飛び起きてしまいました。
体中、特に腕の傷がひどく痛んだ様子でうっと声をあげましたが、それにもかまわず、
「あいつのおかげで脱走できたんだ。あいつが、あいつは、――今ごろはもう……!!」
それだけで真里砂には察しがつきました。
　ああ、かわいそうなルディ……！
緑衣隊の手でどんな拷問を加えられていることか。今ごろはもう、きっと無事な姿ではいないでしょう。
真里砂はきりりと唇をかみしめました。
「……一刻も早く助け出さなくては……！」
その声に鋭がはっと顔をあげました。
ルディに教えられた逃げのびるためのただ一つの方法。
朝日ヶ森学園の数多い生徒の中で、山河を越え自由に森の中をさ迷い歩くことができるのは、不思議な力を持つその少女だけだと言う。
「それじゃ、もしや君が……」
あっけにとられているのを見て、真里砂はまたくすりと笑いました。
輝やかしい朝の森の光の中、心の奥底から突き上げてくる不思議な衝動で体中からいたずらっぽさが湧き上がるようです。
どこからくるのか得体の知れない、奇妙な歓喜したいようなかつて味わった事のない気分に、真里砂はもう一度高く声をたてて笑いました。
「そうよ、わたしがマーシャ、朝日ヶ森のマーシャよ。やっと気がついたのね！」
　「ルディから話を聞いて逃げて来たのだったら、あなたがこれからとりたがっている行動は察しがつくわ。それだけ元気があるのなら一人でいても大丈夫でしょう？戻って来るまでそこの岩影で待っていてね。お腹が空くようなら左手の洞（うろ）に乾した果物が入っているから。」
「待ってくれよ！君はどこへ行く気なんだ？」
「あら。ふふっ！密告しに行くとでも思ったの?!　それならご安心なさいませ。山狩りが始まったら泉（ここ）はあまり安全な場所ではないもの、仲間に連絡をつけに行くだけよ。」
言いながら、真里砂はもう走り出していました。
「こういう荒っぽい仕事には、慣れているからご心配なく！」
　小川を飛び越え、樹間を走り続けながら、真里砂は自分の衝動が狼の遠駆けに似ていると感じました。
それにしてもわたしったら！
何がこんなにうれしく感じられるのかしら……?!

『　（設定メモ☆）　』　（てゆーか、中学の進路指導のプリント類の裏に書いてる☆）

---

『　（設定メモ☆）　』　（てゆーか、中学の進路指導のプリント類の裏に書いてる☆）
2006年7月24日 連載（2周目・大地世界物語） コメント (1)

鋭は骨折（脱走の際の）によって両腕使えるようになってる。

◎主線。

○　いじっぱりで自尊心の強い鋭がいかにしてマーシャの従者に
　　変貌したか。

○　雄輝は欧州滞在中、朝日ヶ森の教生である家教と
　　総本山からのテキストで教育を受けた。

●　そうして振りかえれば
　　既に地の橋など
　　見えはしないのでした。
（東の地・中心地・大地世界領域（守護域）の簡略な模式図あり）

●　一旦地球世界から外に出て、入り口を求めてもどってくる？
　　途中で "力" を求めて、遠隔の地へ行く？

●　大地世界の形状!!

# （　清峰 鋭 と 朝日ヶ森　）

# 『　（無題）　』　（@たぶん中学2年。）

『　（無題）　』　（@たぶん中学2年。）
2007年6月21日 連載（2周目・最終戦争伝説）

　鋭（えい）のトランクを持ったまま、真里砂（まりさ）は一息に階段を飛び降りた。
「大体の所はママから聞いたわ。――政府おかかえの科学者養成センターから逃げだしてきたんですって!?」
真っ黒なストレートヘアがぱさりと顔にかかるのをうるさそうにふりはらって彼女は振り向いた。瞳がわずかに緑がかって見えるのは気のせいなのかな。
　無用心に朝日の中へ出てしまった鋭は目がくらんで一番下の段を踏みはずした。
「うわっ!!」
悪気でなしに真里砂は笑った。
「ほうら、ね。やっぱりトランクはわたしが持っていてよかったでしょう。鋭！　あなた疲れているのね。緑衣隊（りょくいたい）の追跡をまいて来たんじゃ無理ないけれど。」
彼女はまだ彼がどんな目つきで自分を見ているのか気づいていなかった。気づいていたとしても信じなかったろう。
彼女のまわりにそんな物の考え方をする人はいなかったから。
　屈託なく手をさしだした真里砂に対して、鋭はできるだけひややかな薄ら笑いを浮かべて見せた。
「結構。女の子なんかの手を借りなくても起きられるさ。」
「え!?なあに、鋭。」
真里砂は一瞬彼のいんぎん無礼さに鼻白んだ。――“女の子なんか”――？何を言っているのかしらこの人……。
鋭は言葉通り一人で立ちあがると服のほこりをはたきながら言をついだ。
「……それから呼び捨てにするのはよしてほしいな。なれてない。」
「あらっごめんなさい。気にさわって？わたしたちはいつも名前かあだ名で呼びあっているものだから……じゃ、清峰（きよみね）君ね。これでよくて？」
　鋭は返事をしなかった。
冷静なふりはしていても彼も内心かなり面くらっていたのだ。
彼は落ちつくためにざっとこの一風変わった女の子の観察記録をまとめてみた。
　〇髪、黒。眼、黒。身長–やや小柄–20cmくらい。やせ型。はだの色、かなり白い。ぼくと同じ混血（ハーフ）か？
　〇運動神経かなり良し、おてんばというべきか。頭も良さそうである。
　〇性格的にかなり風変りである。ぼくと同学年であるなら11～12歳。ああもずうずうしく堂々と男子の手をつかもうとする女子は見たことがない。
　〇典型的なおじょうさん育ちらしい。

以上。
　真里砂は真里砂で、鋭が不気嫌なのは一ヶ月近かった逃避行で神経がとがっているせいなのだろうと勝手に納得していました。
奇跡的にここへたどりつくまでにはそれこそ命がけだったのでしょうから。
　この次点でかなり重大な誤りを犯してしまったことに二人は気づきませんでした。
「じゃ、清峰君。先に寄宿舎へ行ってこの荷物を置いてきましょうよ。その後（あと）で構内を案内してあげる。……どうしたの？今日は土曜日だから一般授業はお休みなのよ。」
鋭は彼女と並んで歩き始めた時から苦虫をかみつぶしたような顔をしていましたが、彼女が一日自分につきあうつもりだと聞かされた時には苦虫どころかワサビとカラシとコショウとタバスコを一時（いちどき）に飲まされたような顔になりました。
「ご免こうむりたいね、おじょーさま！」
「え!?何か言った？」
「……別に。」
早朝であたりに人影のないのが鋭にとっては不幸中の幸（さいわい）でした。
女と並んで歩いてるなんて！
転校初日からひやかされるはめになるとはなんたる不運だ！　こいつよく平然としてるな。どっかおかしいんじゃないか――。
　「あらいけない。まだ7時前なのね。」
鋭の心配など気にもかけないようすで真里砂がつぶやきました。
のぞきこんだ腕時計の下、白い手首に薄く静脈が浮いています。
「ここでは朝7時から夜の十時までしか異性の寮には入れないの。」
「へえっ。普通は女人・男子禁制だろうに。」
言ってしまってから鋭はあわてて口をつぐんだ。

（未完）
（Okinaの20x20原稿用紙、シャーペンで縦書き）

『　大地世界（ダレムアス）物語シリーズ　前書き　』　（@中学2年かな？）
2007年6月20日 連載（2周目・最終戦争伝説）

~~「序章」　大地の国物語~~
~~大地世界物語・皇女戦記編~~

~~記憶の旅・序章~~

~~体育祭の三日前。~~
~~裏朝日から~~

~~大地世界~~
~~水球世界~~

# 大地世界（ダレムアス）物語シリーズ　前書き

「よーし、一応似て見えるな。」
僕と背恰好の似た奴が、鏡と僕の顔とを見比べながら最後に言った。「眼鏡は？」と僕。まったく見事なものだった。
「それはない方がいいんだ。全部同じにしちゃうとかえって細かい違いがバレやすくなる~~ものなんだ。~~から、かけてなきゃ、あ、ふん囲気違うのはメガネないせいかな、って思われるだろ？」
「――ああ。」僕は肯いて、それから周囲の部屋の中を見回した。そこは二階で、三方の窓に一人づつ、用心深く外の気配をうかがっていた。
~~この連中のリーダーらしい、僕に変装~~
それから、僕に化けた奴のそばに座って変装の手伝いをしていた女の子――どうも~~この娘（こ）~~こいうつはとっかで見~~事がある~~誰かに似ている――（~~ような~~気が~~する。~~）と、その時はばくぜんと感じただけだったけれど。
みんな僕と同じ~~年頃~~小学校5・6年か、せいぜい2つ3つしか違いそうになかったくせに、なんて落ち着いて頼もしく見えた事だろう。~~波の大人なんかより余程頼りがいがありそうだ。~~それから僕は、ずっと気にかかっていた事をきいた。
「だけど君は――君は僕と入れ変わってどうするんだい？　危険などころか、命の保証だって

ないよ。」
　そりゃ、あの場合、僕と僕の荷物の安全が第一だって事を、解って~~るけどき。~~はいたんだけど。
「大丈夫、彼は上手くやるわ。鋭は心配しなくて良いのよ。」
　手伝っていた女の子の方が、チラッと男の子と見かわしながら言ったので、僕は一応彼らを信用して納得する事にした。かの女が、一目で人を安心させてしまうようなきれいな笑い方をしたからだ。――あれ、なんでこの子、僕の名前を知ってたんだろう？　僕は思ったね。
~~僕が少しばかり驚いているのを~~それを見抜いたような顔で、いかにも気の強そうなななめわけのオカッパ頭のその子がウインクした。
~~――違うや。僕がこの子に見覚えがあるような気がしたのは、この子に会った事があるからじゃあ、ない。多分、僕の大好きだった誰かしらに顔の形が似てるって、だけなんだ。~~
「――よ、来たぞ……」
~~僕がちょっと、僕がその誰かしらを、誰だったっけと考えている内に、~~丁度その時、窓にへばりついていた一人が押し殺した声で言った。
　「どっち……？」おかっぱの女の子が素速くそちらへ立って行きながら問い返す。

（☆「おかっぱ頭の女の子」のボールペン描きのイラストあり☆）

　「にせ緑じゃない、おじ様~~たち~~の~~ベンツ~~車＿＿＿＿＿＿＿だ。」
　「よっしゃOK！　おっかないおあにいさん方が来る前に、“にせ清峰”君、A計画発動」
　一応~~一行の~~リードとってたらしい赤っ毛そばかすの奴が、僕に化けた男の子~~の方に~~向ってGOサインを出した。
　「all right！ マーシャ、有澄夫妻に何か伝言は？」
　「そうね、パパにお仕事がんばってって、それからママに、明後日~~の体育祭の時~~、もし来られるようならお稲荷さん3人分お願いします、って、言ってくれる？」
　「わかった。行って来まーす」
　「気をつけ~~てね~~ろよ！　純人！」
　ポーチの方で二言三言しゃべっている声がして、車は直ぐに走り去って行った。~~ひええ、じゃ、この子、有澄夫妻の子供だったわけ？　それにしちゃどっちにも似てないや。隔世遺伝か何かなのかな。と、~~まさか養女だとは思わなかった僕は、マーシャと呼ばれたくだんのオカッパが有澄夫妻の子供と聞いて、まったく似ていないのにキョトンとしていたものだ。
　~~「なにをボヤッとしてんだ、~~
　「ボヤボヤしない、置いて行くぞ！」さっき有澄氏の事を“おじさま”と呼んでた奴がどなる。
　別に僕の動作が鈍かったわけじゃなかった。連中の方でそれこそあっという間に姿を消してしまったのだ――しかも鏡の向う側に。どうやら隠し扉になっていたらしいんだけど、その一年半というもの~~おどろおどろしいホラー~~S・F~~の世界~~S・F~~スパイ小説~~ハードボイルドを地でやっていた僕としては、もういい加減忍者屋敷くらい~~では~~の事では驚く気力も起きなかった~~。のを覚えて~~

~~いる。~~

~~2つ3つの扉を横目でながめながら薄暗い階段をどんどん降りて、最後の扉で地下室らしい所に出る。そこからまたも別の地下道に入って行って、ずんずん走、~~

~~どうやら僕は、今度はホームズやらルパンやらの世界に迷い込んじゃったみだいた。どう考えても、ここ、ごく平和な高級住宅街の中だと思うんだけど。~~

~~「このあたりはね、もともと____藩の出城のあった所なの。」~~

~~僕があきれているのに気がついたのか、隣を走っていた、~~

~~「君、あの、　　有澄、さん？　ここ、君ん家？」~~

~~「真里砂よ。マーシャでいいわ。」~~

僕、こと清峰（きよみね）鋭（えい）が初めてマーシャという女の子に出会ったのは――実は初めてなんかではなかったのだが――こんな風に、えらく素っとん狂な、現実離れした状況の中でだった。

事の起りは僕にIQがその当時でさえ225もあった事、そして今も変わらぬ科学気違いだった事。~~にあるのだろう。多分。~~だけど~~その話を詳しくしてその~~事はそれだけで本一冊分に余る話になるし、僕がこれから書こうとしているのは僕自身の事ではない。マーシャの物語話、マーシャの国、大地世界（ダレムアス）の~~一時期に僕らと共に生きていた~~とその時代そこに~~生きていた~~暮らしていた人々の物語だ。これはずい分と長い話になると思う。それと、言うのも、僕はその当時知らなかった~~ものや~~事や理解できなかったもの、更には話の本筋には直接関わって来ない、故事や神話の類いにまで筆をおよぼす気でいるのだから。

（未完。大学ノートにボールペン書き、直しの嵐の、おそらく第一稿。そして多分、「数学の授業中に」書いていたという気がするな……（^◇^;）＞”）

~~顔の形が似てるって~~ だけ
~~手~~、来たぞ……」
~~ど、僕かその誰かもちを~~ 確
りついていた一人が押し殺した声で言
…？」 おかっぱの女の子が素速く

じゃない、おじ様~~たち~~の~~ペ~~
OK！ おっかないおあ~~ねさん~~に
、A計画発動」
~~の~~ リードとってたらしい赤っも
~~の方~~に向って Go サインを出し
ht！ マーシャ、有澄夫妻に
パにお仕事がんばってね

『　　四、　』　（@たぶん中学1年の。）
2007年6月18日 連載（2周目・最終戦争伝説）

四、

「……へえ！それで!?」
「だから見つからないようにひとまず森はずれのパパとママの別荘にかくまって、総監の許可をとりつけてからパパに連絡つけたのよ。ここ（朝日ヶ森学園）に直接つれて来ても良かったのだけれど、万ヶ一にでも緑衣隊に踏みこまれるような事があったら、これはもうまずかった、失敗でしたではすまされないものね。
で、戸籍身分証明履歴書その他転入手続きに必要な書類一切偽造して裏づけを準備して、後は折良く帰国してらしたパパとママに御協力願いましたわけ。」
真里砂は養父母である有澄（ありずみ）夫妻がある日沖縄滞在中の親友夫妻の死亡通知――無論彼女が偽造した――を受けとってから、身寄りもなくなるままに知己を頼って上京してきたその遺児を横浜港まで向えに行って朝日ヶ森のはずれのちっぽけな別荘に連れて来た（ことになっている）事のてん末をざっと話して聞かせました。
それからいたずらっぽく片目をつぶって、
「もちろんわたしはその事は全部、母親からの手紙で知ったのよ」。
相手の、一つ年上の幼ななじみ雄輝（ゆうき）も、そのあたりはちゃんと心得ていて、真っ白い歯でニッと笑い返します。
「そこまでで二十日。そこでお優しい我が母上様は両親を失ったばかりの傷心の清峰鋭殿を、心づくしの手料理で十日かかってお慰めもうしあげ、休暇のあける一週間前に愛娘ともう一人の親友の遺児翼（つばさ）雄輝がいる全寮生の学校に少年を連れて転入手続きにやって来る――。今日がその日よ。そろそろ呼び出しがかかる頃……あ、ほら来た。」
言葉通りそこへ下級生の一人がやって来て、大至急学長室へ来るようにと伝言を残して去って行きました。
さすがの真里砂も息をついで、汗をかいてもいない額を手の甲でぬぐいました。
「万事良し、計画終了。……これでどこのだれが出て来ようとも鋭と朝日ヶ森学園に手出しをする事は不可能になったわ。」
「確かな裏づけをもってここに入学している限り、朝日ヶ森の生徒を学園の意志に反してどうこうできる人間なんていやしないからな。肩の荷が降りたろ？」
「あっは、まあね。」
　なをも話している間に二人は学長室の前までやって来ました。
真里砂が先に立ってノッカーをたたき、
「……失礼します。翼雄輝、有澄真里砂両名参りました。」

扉を開けて一歩中に踏み込むと、真里砂が想像していた通り重いかし材の机をはさんで、上品な二人の婦人が談笑していました。
一人はこの朝日ヶ森学園学長。
推定年齢六十余歳、一見して英国のエリザベス一世を想起させる銀髪の老婦人。
もう一人は真里砂の養母で、32歳とはとても見えない少女のような容貌と華奢な体つきの児童文学作家有澄冴子（ありずみさえこ）。
かつてこの学園を現在の有澄建（たける）氏と共に主席で卒業した、朝日ヶ森の次期学長候補でもあり、言語学の大家として実に38ヶ国語を巧みに操って外交官である夫をささえているその聡明な美しさは、各国上流社交界からいつも多大な好意をもって迎えられていました。
有澄夫人のすばらしさといったら、本人でさえ分不相応と自覚する程におそろしく誇り高い真里砂自らが、人前で平然とマザー・コンプレックスを自称して恥じない程だったのです。
　この二人とはやや離れた所に、中型のトランクを一つ脇に置いて鋭が実に居心地悪そうに腰かけていました。
真里砂がやって来てよほどほっとしたのか、二人が初対面である事を忘れて声をかけて来そうにしたので、真里砂はそのすきを与えないよう慌てて巨大な学長机へ歩み寄らねばなりませんでした。
「ママお久しぶり、お変わりありません。学長教授難かご用ですか？」
真里砂が白々しくもにこやかに微笑（ほほえ）みますと学長も百戦錬磨の古強者らしく大いに楽しんで、口の端にニンマリとも形容できる表状を浮かべました。
「ええ用と言うほどの事でもありませんが、転入生を紹介しておこうと思ったのですよ。」
「――ああ！」
真里砂は納得したというようにうなずき、独特の顔だちをした頭を斜めに傾けて、茶目っけたっぷりに、興味しんしんといった目つきを見知らぬ少年に投げかける――縁起をやってのけました。
「母から話はうかがっております。――彼がそうですの？」
学長はそうだと言うようにうなずき、かわりに有澄夫人が立って彼を紹介しました。
「清峰君こちらへいらっしゃいな。……娘と、あなたと同じように数年前に御両親を亡くされて、私たちが後見役をしている翼君。」
初めましてと真里砂が言った時の鋭の顔と言ったらありませんでした。
「真里砂ですよろしく。マーシャで良くてよ。手続きがもう済んでいるのだったら一緒に行きましょう。学内を案内するわ。」
「……あ、はあ……」
「僕は雄輝。荷物はこれだけ？」
「え！ええ。あの……そう……です……」
こうなるともう完全に真里砂は楽しんでいました。
「大人しくていらっしゃるのね。さあ行きましょうか。……それじゃお母さま、また後で。」
~~耳元で驚愕行進曲と運命を同時に最大音量で聞かされたか、さもなければ本場のインドカレーと~~

~~お汁粉をいっぺんに口につっこまれたような顔をして歩き始めた鋭をはさんで、真里砂と雄輝はパチリとウィンクを交しました。~~
~~後ろで有澄夫人が懸命に笑いを押さえている事は気配でわかります。~~
~~扉を閉めた後も二人はわざと生真面目そうな顔をとりつくろって歩いて行き　　校舎を出た所で、ついに大爆発を起こしました。~~

ここまでは、
・真里砂は何も知らずに、森の中で走り回っていた時、
　道に迷っていた鋭を見つけて有澄夫妻の別荘に送りとどけ、
・書類偽造等して鋭を朝日ヶ森につれて来たのは有澄夫妻。

「まったくもって気に喰わないわあんの奴！」
真里砂が頭から湯気をたてんばかりに言うと、雄輝が額を押さえて笑いながら半ばあきれた口調で言いました。
「まったく大した奴だよあの鋭っての。おまえをつかまえて『女なんかくだらない』って言ってのけるんだからなァ……　このおまえをさ。」
「笑い事ではないわよ。ええい、もう！――あ～あ！まったく頭に来る！」
　広大な国立公園に隣接する、これもまた迷い込んだら生きては出られない（おまけに所々原因不明に磁石が利かなくなるというごていねいな）大原生林・朝日ヶ森を、そっくりそのまま国から買い受けて敷地にしている世界的な名門私立校朝日ヶ森学園。

（未完。）

# （ 清峰 鋭 の物語 ）

# 『　清峰　鋭 の 物語　1 』　（1995.04.08）

『　清峰　鋭（きよみねえい／リレキセス・ジュンナール）の物語　1　』　（@1995.04.08～）　.

2006年11月30日 連載（2周目・最終戦争伝説）

うちの主要キャラクター（？）のうちでは最長寿の部類ではなかろうか？　惑星・地球の滅亡（文化・文明ではなく“星の”消滅だ★）を見届けているので、少なくとも億単位で、同一の肉体（うつわ）を使って生存していたことになる。その旅の全貌……なんてものは作者にだって謎のままである。はっきり言って知りたいとも思わない★

惑星《地球》、西暦1900年代の終盤の生まれ。正確には人類ではなく、“半神人”に近いが、本人がそれを知るのは成長して後のことだった。

父親は普通？の人類（ひとぞく）である日本人戦場カメラマンの磯原岳人（いそはら・がくと）。内乱中のアフリカ（もしくは中東？）奥地の岩砂漠において乗っていたジープごと地雷を踏んで遭難した彼を、偶然（ではないが）発見し、興味半分で救ってしまった水霊の末娘（アトル・ウルワニ）が、岳人の精神の毅さに魅かれ、水の太霊である母親の意志に背く――（人類の数え方でいう西暦1900年代、2つの大戦とそれに重複した自然破壊の深刻さに怒った水の太霊は、とうとう精霊たち全てに呼びかけて人類を滅ぼすべく行動を起こし始めていた）――と知りながら、人類と精霊との新たな契約の証として創り出した生命（うつわ）である。

磯原岳人は、近隣で活動中だったNGO『国境なき医師団』（たぶん☆）の看護婦であり、白の一族の娘でもあった第5の（ミーニエ）マリセに救われて日本に戻り、後に植民者連合（コロニスツ）世界を中心として歴史に名を残した磯原清らの父親となる（これはまた別の物語である）。

水の末娘は、史上唯一の“水の息子”（アトル・ウルワー）の養育を、父親？の出身地である島国の、山中の清浄な（水が豊富ではあるが海＝水の太霊の版図＝からは遠い）町に住む人類に託すことにし、水の姉娘たちの密かな協力と加護のもとで、その子供は育つことになった。
人界の用語？で言えば日本の長野（山梨かも）の田舎町のはずれにある、キリスト教会付属の愛護園（孤児院）の玄関先で、生後まもない捨て子として発見され、その雨上がりの朝、町を見おろす南アルプスの峰々があまりにも美しく峻険であったことから、園長によって“清峰 鋭 ”と命名された。質素ではあるが愛情と信仰心に恵まれた穏やかな環境であった。

その当時（西暦2000年代初頭）、日本国における政治？状況は悪化の一途をたどり、いまだ表面化はしていないものの、内部での武力によるクーデター（暗闘）の結果、『センター』と呼ばれる軍事（研究）機関が、多大な権力を握るようになっていた。
彼らは国民の総背番号化による動向の管理や、TVなど電子メディアへの介入（サブリミナル操作等）による思想の統制・方向づけを図ると同時に、優秀な素質を持つ子供を集めて早期教育を施し、次世代戦力の中核にしようという生体実験のプロジェクトを進行させており、その一貫として保育・幼稚園と小学校各学年における知能テストの普及強化が行われた。

清峰鋭は、乳幼児のころから異様に泳ぎが得意で、水難事故にあっても平気で生還するわ、寒中水泳に参加させれば何時間でも喜んで雪の降る海に潜っているわで、周囲の大人は少々肝を冷やすが、それ以外では従順で善良な性格の、おとなしい（無口な？）子供として、むしろ目だたないように振る舞っている。早熟で高い知能と人格とを持っており、小学校低学年にして大人の新聞を平気で読みこなし、園長名義で図書館から専門書を借りてきて読みあさるなどの芸当も、誰に教えられた訳でもなく弁えていた。
が、どうやらこれも謎の人物で、政治？の暗黒部分？の情報を、ある程度もっていたと覚しい園長の忠告に従って、その発達した知性を外部には漏らさないよう、注意して行動する習慣を身につけていた。学校のふだんのテストはもちろん、『センター』による統一知能テストでも、“やや利口”以上の点をたたき出すことがないよう、計算して解答していたフシがある。

しかし近所のマニアックな理工系の大学生と、ついうっかり“対等な”友人づきあいをしてしまった結果、口コミでその存在が『センター』に知られてしまい、『早期教育プログラム』の対象者として育った町から引き離されることになった。逆らえば園長の地位に圧力がかかり、つまり愛護園のほかの子供たちが行き場を失う事になるという脅しを受けて、やむなく『同意書』にサインを取られ、泣き伏す園長に簡単な別れを告げただけで、鋭は『センター』さしまわしの護送？車に乗せられた。彼本人の感覚から言えば、この時が、すべての“旅”の始まりとなっている。

これに間一髪で間に合わず、地団駄を踏んだのが『朝日ヶ森』の行動部隊である小学部の子供たちである。清峰鋭の天与の才については、『朝日ヶ森』関係者？である園長から早いうちに報告？がなされていたが、息子同然に愛情を注いでいた園長が、できれば手元に置きたいと望み、本人もそれに同意していた為、『朝日ヶ森』への編入は中等部以降という話になっていた（らしい）。が、『センター』の調査が身辺に及んでいると察知した『朝日ヶ森』が、しばらく迷った後に迎えの部隊を出した、その一足違いで、身柄を拘束（ほとんど誘拐）されてしまった訳である。

この迎えの部隊の謎の行動にひかれて救出作戦に同行したのが、清峰 鋭 に淡い初恋？を抱いていた同級生（小学4年生）で、当時は事故で両親を失ったショックにより言葉を失くし（全完

黙症？）ていた楠木律子である。彼女には、その両親にからんだ別の物語において精霊族の不思議との関わりがあり、その血筋と才を見いだされて、救出作戦の後、『朝日ヶ森』に編入の運びとなった。後の『朝日ヶ森』第？代理事長である楠木女史その人であり、清峰 鋭 の息子（アトゥルヤー・アイラーヤム）を産んだ高原律子（たかはら・りつこ）を『朝日ヶ森』大使？として大地世界（ダィレムアス）に送り込んだ、実の祖母であり養い親でもある。

鋭は『センター』の北海道支部？へ護送の途中で、同じ車に乗り合わせた『朝日ヶ森』からの少年スパイ？、燎野（リョーノ）と知り合う。実験体として『センター』に捕らえられた精霊族の血をひく友人、ティシール・ティシーリアを救出する為に無謀とも思える『センター』侵入を敢行した彼は、ティシールとの再会を果たした後、脱出に失敗して二人ともに落命した。

この時、『センター』側の実験体として合成されながら、長じて実権を握る（少なくとも権力闘争で互角に渡り合う）までに成長していた少女（コードネームは無津城（NATSUKI））が、同年代の唯一の知り合いで、あるいは恋心が芽生えていたのかもしれない燎野の逃亡を助ける為に『センター』を裏切る行動をとり、絶命させられた。

彼女の生体脳を取り出して機械脳にリンクさせたものが後々『センター』の中枢頭脳としての役割を果たすが、ナツキの亡霊？の意志によって、キーワード『リョーノ』を知るものなら誰でも最優先で命令を下す事ができるという裏プログラムが付与された。

（このプログラムによって杉谷好一・当時13～4歳？が会田正行に命を救われてしまい、結果として23世紀の地球文明の命運を分ける事になった。また、このパスワードを知る者が21世紀半ばで全滅？していた為、忘れられたまま消されることもなく存続しており、23世紀に入って再び杉谷に活用されている）。

この時の騒動に乗じて清峰 鋭 は『センター』からの自力脱出に成功したため、結果として楠木律子と同行していた『朝日ヶ森』救出部隊とは行き違う。
北海道は帯広南部？の川から下って海をわたり本州の北部まで？、ほとんど泳いで！（ほんとーか～っっ!?）、逃避行を続けた彼は、さすがに体力？の限界を極めて行き倒れ寸前のところ、別の目的で山中を移動していた『朝日ヶ森』の有澄真里砂（ありずみ・まりさ）（大地世界（ダレムアス）での名称は皇女マーライシャ）らのグループに拾われ、何とか無事に『朝日ヶ森』へと辿り着いた。

そこで半年ほど休養を兼ねて学生として暮らした後、文系？である『朝日ヶ森』の姉妹校で、スイス？にある理工系の『アロウ・スクール（仮称）』へ転校（国外逃亡）するのが本人の希望であったが、直通の密航船が来るより早く、皇女であるマーライシャの迎えの魔法？に巻き込まれて大地世界へ抜けてしまった。この時、地球年齢で11歳ぐらいであった。

# 『　清峰　鋭 の 物語　２ 』　（1995.04.08）

『　清峰　鋭（きよみねえい／リレキセス・ジュンナール）の物語　２　』　（@1995.04.08～）　。
2006年11月30日 連載（2周目・最終戦争伝説）

　地球時間で約150年（設定未決★）にわたった、大地世界における彼の行動の詳細については、『大地世界物語・皇女戦記編』を参照されたい。

　個人的な物語としては、大地世界で皇女の冒険にまきこまれ、行動を共にするうちに、マーライシャへの初恋を自覚するが、同時に、後に皇女の夫となった 翼 雄輝（つばさ・ゆうき）がいる限り失恋確定だという事実を認識し、かといって打ち消せるような半端な感情では有り得ず、その矛盾から逃れるまでは思考・行動ともに相当ヒネクレまくっていた。
　早くから球の地（ティカーセラス）系勢力によって英雄として祭り上げられた雄輝（マ・ディアロ）に比べ、皇女の従者または医師としての立場しか認められずにいた自分への引け目もあったと思われる。

　皇女の遍歴の半ば、大地の背骨山脈（ミアテイネア）の真奥・神都“始源平野”（マドリアウィ）への訪問に同行した際、かの地の火口で永遠の眠りについていた半神女マリステアと交感し、同じ半神人としての出自を初めて示唆されるが、「それはまた別の物語」として、詳しいことは語られない。
　苦しみや疑問や、すべての謎に問いかけ続ける毅さを自ら望むのであれば、永遠無窮の旅をするがよい……と、半神女マリステアは自らが放棄した“神”としての寿命（の一部？）を彼に分け与えた。

　（大地世界の伝承においては“不老長寿の秘薬”として語られているが、これはあくまでも現象界における象徴（イメージ）であり、物語の小道具に過ぎない）。

　また、この事実は彼が大地世界で活躍していた当時は一般には伏せられていた。何とならば、この事によって大地世界そのものに割譲される筈だった“命数”が大幅に減ったからである。

　その後、皇女が陣容を整えるに従って、懐刀である清峰（ジュンナール）の声望も必然的に上がり、また地球文明では基礎中の基礎である簡単な物理学（滑車やテコの原理）などを大地民にも解りやすい形で応用する機会が重なって、“知神ヨーリャの再来”として水神（ヨーリャ）学派（信徒）を束ねる存在になる。

　が、地球からの諸勢力が大地世界への侵攻を開始し、大地・洞地・球地みつどもえの乱戦に突

入すると同時に、立場は不安定なものとなった。
　早くから大地世界への帰化を宣言していた雄輝に比べ、彼はいずれ地球に帰るものと自分でも思っており、長く離れていた地球での政情の変化などについて、大地世界でもっとも苦にしていたのは彼でもあった。

　友人の苦悩を救う意図もあり、同時に政治的な必要性もあって、界間の通廊をその監視下におく月女神レリナルの協力を仰いだ皇女が、地球世界との架け橋として呼び寄せたのが、『朝日ヶ森』の当時の理事長を務めていた楠木律子の―（この辺また年表がおかしい★）――、孫娘・高原律子であった。
　彼女の経験については皇女戦記中に一章を設けて語られている。彼女にとっては出逢った当初は遥かに年上に感じられた清峰 鋭 は、命の恩人でもあり、憧れのヒーローでもあった。

　その他、実は彼に心酔していた人物は相当数いた筈だと思われるが、当の本人はその美貌を自覚するというよりは、いまだ自分の女顔に対するコンプレックスを引きずっており、皇女以外には恋愛感情を抱けなかった（と言うより、日々に失恋し続けていた）せいもあり、いたって無頓着なボクネンジンだった。
　一方で、地球圏からの侵略軍基地に潜入した際、大地世界には存在し得なかった悪しき？風習である同性愛？者によって強姦されちゃったりという経験もしている★　その後は少しは自分に対する認識が変わったようで……★

　長きにわたった3界の乱戦時代が終わり、月女神によって界狭間の結界が閉じられる事になった際、皇女と雄輝との戴冠・婚姻を待たずに、清峰 鋭 と高原律子とは本来の所属世界へと帰還した。

.

# 『　清峰　鋭 の 物語　３ 』　（1995.04.08）

『　清峰　鋭（きよみねえい／リレキセス・ジュンナール）の物語　３　』　（@1995.04.08～）

2006年11月30日 連載（2周目・最終戦争伝説）

第三次世界大戦が無し崩しに終結せざるを得なかった“大天災”後の混乱時代、なかば鎖国と化した日本国で、なおかつ健闘を続ける『朝日ヶ森』勢力のもとに、帰界した2人はいったん身を寄せた。西暦2100年代終盤。清峰 鋭 にしてみれば記憶にある地球界から100年以上の後、律子にしてみても知己の人間がすべて老齢と化した時代である。

が、『朝日ヶ森』の体質がその程度で変わっている訳では全然なく、使える人材はすべて活用されまくる宿命で、帰国後早々に2人は月面都市へと出向？させられた（この辺の動向は不明確）。そこでしばらくの新婚生活？を営むが、律子が妊娠を告げる間もなく、地球の“水”の危機を抑えるべく、清峰 鋭 は慌ただしく母星へ戻って行った。

（このへんの時間軸が計算すると少しヘンである。いま気がついたが、“息子”だと思っていたアルヤさんは、水の息子の娘（アトル・ウルワー・ウルワニ）の子、つまり“孫”かも知れない★）

地上では生命の母である水の太霊が、ヒト族もろともに全てを滅ぼそうと最後の崩壊？の準備にかかっていた。惑星上のすべての精霊族がまきこまれて悲鳴をあげる中、自らの出自をようやく悟った清峰 鋭 は、母？である水霊の末娘とともに海中？に赴き、水の太母を説得し、なだめる役割を果たす。これによって太母は長い悲嘆を清算するために帰天し、末娘が次代の水霊の束ねとなるが、荒れきった海の苦悩？をおさめる為に力を使い果たして、海底深く眠りにつくことになった。この後、ほとんどの精霊族は休眠？し、ヒト族の命運を遠くから監視or見放す？立場となった。

この経験の後しばらくして、長寿であり容姿がまったく変わらない清峰 鋭 は、『朝日ヶ森』の一部にのみ事情を打ち明けて、知己のいない地中海地方に拠点を移した。
『朝日ヶ森』の姉妹校である旧スイス領（この次代、EUなんかとっくに消滅し、延々と広がる西欧文明の廃虚の間に、わずかに国家or行政機構と呼べるシロモノが3群ばかりほそぼそと機能しているだけである）にしぶとく生き残っていたアロウ・スクールを指令塔として、生き残った人類の救援活動や、頻発していた略奪行為の鎮圧などの部隊に参加していた。

欧亜混血風に見られる外見のおかげで、『朝日ヶ森』での周囲の評価は“大人になりかけの天才少年”、だったのが、白人だらけの間では完全に“少年兵”扱いとなり、その環境に甘えが出たのか、

本人の性格にもだいぶ変化が生じた。汚れきって死に果てた海を目にしては泣き、海が見えない地域に行けば海が恋しいといってはまたメソメソしている奇妙な“少年”を気にかけた隊長達からたいそう可愛がられ、生まれて初めて他人に甘えるという状況を味わった。
（……この頃、月面では律子が一人で赤ん坊を育てつつキャリアウーマンしている……★）

やがて、歳をとらない容貌を簡単な変装ていどでごまかし続けるのも無理が出て、名前と髪や瞳の色を変えて「清峰 鋭 のイトコ」とか、適当にでっち上げて再び『朝日ヶ森』の管轄である太平洋地域へ戻って行った。

『朝日ヶ森』コネクションに月面から人探しの目的で派遣されてきたチーム（隊長？の名前は杉谷好一だ★）の案内人として、ユーラシア大陸の地表横断という無謀な旅に参加する。道中、地表の汚染度や汚染物質・汚染細菌の種類などを測定するという、監視衛星からでは収集できないデータを拾って来いという危険な任務つき。「不老長寿なだけで、不老不死ではないぞー」とボヤキつつ、けっこう気軽に指令を受けたのは、一人で長生きしなければならない事実に、早くも少し厭き初めていたのかも知れない。

ところがギッチョン、事実は小説より奇なり？で、名前しか知らなかった実の父？の、実の息子（つまりは異母？弟）である磯原清と、双方ともに生まれた時代からは200年ばかりの時差を経て出逢い、お友達してしまう。退屈してる暇なんかないなぁ！という現実？を実感し、その後、また少し性格が変わってしまった★
（つまりはノーテンキ？になった……単に清クンのが染っただけか？）

異母弟の方はその事実を最後まで、たぶん知らなかったし、鋭の方でも最初しばらくは気づかなかったのだが、さすがに血は水よりも濃いとゆうのか（血の中に“水”の気配が濃いもの同士だったと言うべきか？）、出逢った当初より意気投合？して違和感なくつきあっていた。
同時代の歌（20世紀末期に流行って？いた歌を、清クンは母親から、鋭は孤児院の園長先生から習い覚えていて、レパートリーが一致していた……環境だのボランティアだのやっている人間同士の音楽の趣味は、かなりの範囲で重なっている）を二人で合唱して周囲に聴かせるという共通の趣味を開発して、ユミちゃんと3人でバンドの真似ごとなどして、荒野のキャラバン御一行サマの、目と耳の保養になっていた。（清やユミちゃんと仲が良くなりすぎた結果、杉谷氏の秘かな不興を買っていた事は、言うまでもない★　……ゆかり姫やひろと変輩などとは、普通につきあっていた）。

ユーラシア横断から北米大陸まで渡り、南米経由でスターエア島に戻って月面に帰還した、会田正行おっかけツアー珍道中？の話は、もちろんの事、また別の長い物語である★

磯原清が旅の途中で偶然拾い、『朝日ヶ森』に預けてすぐに出発してしまったおかげで、養父

？になるべきだった清峰 鋭 が、長らくその存在を知らずにいた赤ん坊の成長の物語が、設定上の矛盾で今ちょっと宙に浮いている★　結論から言えば彼は大地世界の最後の皇子で、つまりマーライシャと雄輝の孫に当たる……？

　その後のダレムアスはと言えば、界境を閉じて乱れた世の復興を図ったはいいが、世界に等分されるはずだった半神女マリステアの命数が清峰 鋭 個人に譲渡されてしまった為に生命の寿命（世代交代期間）が大戦前の10分の1程度に縮まってしまっている事実が、女皇マーライシャの治世の半ばに判明し、かつ、3界乱戦の際に次元階梯をさんざん乱されたせいで亜空間としての存在力も弱り、時場も狂い初めたために地球世界との経時差も発生し……で、一足早く崩壊した洞地世界に次いで、世界としての滅びの時を、今まさに迎えんとしていた。

（下線の用語の定義？については、そのうち『星圏史略』で書く★）

　生き残った大地の生命たちを救済する手段を求めて、かつて知神ヨーリャの再来と呼ばれた英雄を探しだそうとして、マーライシャ女皇が晩年（かなりの高齢出産★）になって夫・雄輝との間に産んだ双子の皇子・皇女が、異界への無謀な旅に出て行方不明になった。

　その双子が遥かな異界を点々とするうちに結ばれて生まれたのが（なんか竹宮恵子が似た話を描いたが、アレより古くからあった設定だ★）、あの赤ん坊……だった筈……なんだが……あれ？　れ？

　七福神財団（※当時の実質的な“日本国”。）――（なんで私はこんな名前をつけたんだーっ?!）――に追われて逃げて、海洋汚染と気象異変が激しくてほとんど生命が残っていない南アジアの泥海（洪水の影響で海岸線がかなり上がっている）経由、インド亜大陸を横断して西進しようとするが磁気嵐？か何かに阻まれてヒマラヤ山脈の西端から旧ロシア領辺境地帯へ抜け、ウラル山脈の南端をかすめてアルプス山脈の“アロウ・エリア”へ。

　ここで清峰 鋭の案内人？としての任務は終了し、収集した汚染データを持って清たち一行とは別れる。

　ちなみにアロウ校にはヤニさん（お懐かしや……）の一人息子（ダンナは戦死）も預けられていて、当時12歳ぐらい。

　その後、どこでどうしていたのか詳細は不明だが、おそらくは、またしばらく欧州でウロウロ？した後、南米経由でスターエア島に渡り、月面世界にひょっこり顔を出し、会田先輩の奪還後、一度21世紀に戻ってから再び未来社会に移住？して来て社会的地位？を築きつつあった清たちと再会する。

ついでにアルヤさんと初対面。（仕事がら、役職と通称ぐらいは当然知っていたが）、正式名称“水の息子の縁者”（アトゥルヤー・アィラーヤム）で名乗られて愕然とし、自分に息子（もしくは孫？）がいたという事実と、律子が若く（外見上は38歳ぐらい）して死んでしまっていることを知って、さすがにしばらく頭が混乱していた……が、せいぜい3日でキッチリ復活し、“アルヤさんで遊ぶ”という新しい趣味を開発してしまった……。

『朝日ヶ森』と植民者連合（コロニスツ）を結ぶ非公式の外交官（ほとんど全権大使）的役割を、亡き律子に代わって果たす一方で、謎の情報源（大地世界で得たエルシャムリア文明についての知識）を持つ天才科学者（笑）として、政治面での業務で多忙を極めていたアルヤさんの肩代わりも兼ねて、月面遺跡（エルシャムリアそのものか、もしくは上古文明の遺構の一部）の発掘・分析に携わる。

そこへ、例の大地世界最後の皇子？が何らかの手段（どうも戦士・黒百合という、皇女マーライシャに縁のあった別の不死人の助力らしい）で彼を探しあてて訪ねてき、助力を請われて一時的（ただし月面遺跡の移動装置を使ったので、当該《単還流》（タペナ）における時間軸との相関性はちょっと不明★）に、大地世界のその後を訪れ、月面遺跡で仕入れた超（笑）技術を駆使して、生き残りの大地民を移住させるための“船”、『精霊族からの贈り物』（フェア・リスティラーヤ）を幾つか建造して移民の出発を見送った。

（この中の一隻で、先祖返りしてエルシャムリアの翼人の外見に近くなっていた飛仙の子孫たちを乗せていたやつが、航宙？中に時標を踏み誤ってしまい、数千年あるいは万年単位で時間流を遡ってから辿り着いたのが、後に“我らが美わしの天地”（リ・イス・スタル・アールラーナ）文明の母星（リスタルラーナ）と呼ばれることになる惑星である★）

そのゴタゴタから戻って息つく暇（本人の主観時間で）もないうちに今度は、地球文明が完全に滅びるのを見て人類が虚脱状態に陥ってしまう前に恒星間移民をしてしまおうという“白の一族”（アルバトーレ）――（※アルバトーレという音は設定を作る以前から勝手に頭の中にあって、あまり英語臭い音でイヤだったので、“ア・ルーヴァ・タゥーレ”という上古風？の音に分解して使おうと思っていたが、語幹？の“alb”をある日なんの気なしに調べてみたら、ラテン語！で“白”を意味する単語なのであった★）、――の主張に巻き込まれ、本人は納得していないうちにアルヤさんの泣き落とし？にかかって、地球人用の移民船の設計施工を監督するはめになった。

おかげで、移民反対派の筆頭である杉谷好一氏に何度も刺客はプレゼントされちゃうわ、結局、設計者の責任をとって一隻に乗り込んで地球圏を後にするハメになるわで、うっかり父性愛？に流されるとロクな事にはならないという教訓を体験した……。

　こちらは海路の日和？を得て、なんら事故ることなく数百年？ほどのコールドスリープをを経て、すでに文化の発展と崩壊とそこから復活した勢いを駆っての恒星間文明の繁栄を極めた後の、精神的な衰退期に入りつつあったリスタルラーナ文明圏の、端っこに到着した。

.

# 『　清峰　鋭 の 物語　４ 』　（1995.04.08）

『　清峰　鋭（きよみねえい／リレキセス・ジュンナール）の物語　４　』　（@1995.04.08～）　.
2006年11月30日 連載（2周目・最終戦争伝説） コメント (1)

鋭ほか『朝日ヶ森』およびアロウ系の数名が、お得意の隠密行動で情報を収集した結果、遺伝子や文化・文明・言語のパターンに、かなりというよりは必然以上の一致点を発見しまくった結果――（実はほとんど同族であるという“ことの次第”を明確に理解していたのは、もちろん鋭一人で、事態をかなり面白がっていた★）、――それなら事態を荒立てるより秘密裡にさりげなく“移民”してしまえばー？という結論になり、ペーパーカンパニーならぬペーパー研究所を設立し、地球系移民の人種的特徴を「遺伝子操作による“実験体”」と言い繕って漸次2万人ほどをリスタルラーナ世界に送り込んだ。

この時、無用な摩擦を避ける為に、一般市民に対しては本人たちにも記憶操作を施して、それが事実だと思いこませたので、その後の数百年を経て正式に地球文明圏との国交樹立を巡る問題が政治上の重要な争点となった頃には、実は自分の曾祖父（ひいじいさん）は地球人で……なんて事を知っている人間は一人もいなかった。

が、血筋はやっぱり争えないのか、美天地人（リスタルラーノ）にしては喧嘩っぱやいと言うか感情的で、理屈ぬきの勘と行動力を備えている親テラズ派の連中は、たいがい地球系の遺伝子を多めに持っている……★

居所と名前と経歴を点々と変えつつ、地球系移民のその後の生活をさりげなくフォローしてやりつつサンタクロースな気分ではあるがけっこう孤独をかこっていた清峰 鋭 は、地球圏との国交樹立を裏から密かに支援はしていたが、原則として政治向きの事には手も顔も出さないように気をつけていた。

が、サキ・ランという有名人が“芸術系の交換留学生”として活躍しはじめ、地球圏の最終戦争伝説についての再現映画を撮影する……とかいう企画を耳にするに及んで自制心を蹴り飛ばし、―さすがに“正体”を明かしたのはサキにだけだったが、――古史古伝に詳しいという触れ込み（事実ではある★）で、映画撮影のスタッフにちゃっかり割り込んだ。

そのついでに、サキたちの副業？やら何やらにも巻き込まれ、政治的暗殺未遂事件（ソレル女史が殺されかけた騒ぎ）だの、麻薬密輸団取締事件（『黄金指輪の物語』）だの、両文明圏における気波技術者（エスパッショノン）の社会的立場の確立運動などにも、期せずして一役買って

いる。

　対アンガヴァス戦役と続くジースト革命、国交の樹立と安定を経て、エスパッション・スクールの創立後、以後の運営には心配なしと見たサキ及びレイが、リステラス特務部隊員として深宇宙探査の船に乗り込んだ時には、コネを使ってちゃっかり同行している。

　対《邪魔》（ジャマー）戦でサキやレイなど数名が落命した際に一緒に行方不明になり「生存は絶望」と記録には残されているが、実はこの時、サキら気派技術者（エスパッショニスト）とのみ接触をとり、共に作戦行動をとっていた“遍在文明”（オーヴァー・ビーイング）からの“ガス漏れ修理員”（もしくは水道管破損箇所点検人とか……そういうニュアンス★）たちに拾ってもらって、上級文明圏に遊びに行ったのだった。

　そこで多脳人類だの無移動存在だの無形遍在だのという、よく判らない連中とお友達になりかけるが、やっぱり途中で退屈？してしまい「次元落ち」して、タコだのアメーバ型だのいわゆる“普通の異星人”文明をあっちこっち漫遊？した後、結局ホームシックになって、その当時“リズヴェッサ（遺伝子管理機構）体制”を名乗って破竹の勢いしていたリステラス星圏に帰還した。

　この頃になると、数万年・数十万年を旅に生きているヘンな存在も自分だけではないと判り、期せずして幾度も再会してしまう顔見知り？や、転生しても覚えていてくれる友人？も増えて開き直っているので、もはや通常の“人類”とは言い難いメンタリティ……に、なりそうでなっていないのが、この人の不思議なトコロ。

　幾つかの短い旅を経て、未開惑星の神聖王として奉り上げられたりしていたらしいが、かつて皇女マーライシャであった転生体の少女の養育を任された経験（誰にかと言えば、多分またぞろ、戦士・黒百合のおねーさまだろう……この人もほんとに長生き★）を経て、自らの旅の終わりが近づきつつある事を知る。

　永遠不変のように思われていたリズヴェッサ体制が、一部指導者層の辺境星域への理由なき？亡命という裏切り行為によって内部から崩壊した後、銀河系の混迷と衰退のながい黄昏の時代の中で、かつて《地球》と呼ばれていた小さな惑星が、素朴な農業王国として再建され、そしてまたその支配者や所有企業が転々と変わり、戦乱と政争に巻き込まれ、恒星の寿命が短化されて不毛な岩漠惑星となった。

　恒星の爆発と超新星化によって惑星群が消滅するまでのカウントダウンが始められた頃、すでに通常の人類ならば生存不可能な状態と化している地表に個人用宇宙艇で降り立った清峰 鋭 は、そこでやはり地球と命運を共にするべく……と言うよりは、彼ならおそらくそうするだろうので、そこで待っていれば同行できるだろう……という推測と期待に基づいて降下してきた、かつて

の妻・律子の転生記憶をもつ少女と再会を果たした。

　その地表に停泊させた宇宙艇の中での静かで穏やかな共同生活の間、清峰 鋭 と、かつて律子であり幾度かの転生記憶を持つ少女は、互いの記憶や知識を突き合わせつつ、知る限りの喧々と史実とをたわむれに書き留め、書き残すことにした。超新星の爆発に呑まれてなお、その記録が誰かの手に渡る事がもしあるならば、それもまた宇宙の“波”の一つであろうという事で……

　いよいよの爆発が予告されたその日、惑星の死に立ち会うために訪れた地球にゆかりのある他の長寿人たちとは通信で別れを交わし、結局、彼らからの要望に従って書き残した史料を譲り渡した後に、二人は泰然として静かな眠りに就いた。

　小型宇宙艇に備えつけの普及型生命維持カプセルが、超新星の爆発に呑まれた惑星の上において、その目的とする機能を果たし得るかは、はなはだ疑問である。そうではあるが、なおかつ、この特殊な歴史を歩んだ惑星の上で育まれた様々な想念や、その結晶化し特化した存在である精霊たちの残党が、二人の肉体（うつわ）をそのままの形で護ったのではないか……と、書き残された史料を解読・研究しようとする愛読者の中からは、一種の信仰とも呼べる仮説（伝説？）が生まれ、宝探しにも似た感覚でカプセルを探索する者がその後しばらくの時代にわたって散発していた。

　また、人間の魂（記憶？）の中に転生・再生するものもあるという実証に基づき、彼らのその後の生命形態を予測・捜索する懸賞金のプロジェクトなども一部マニアックの間で続けられていた。

　……そして星々はめぐり、歴史は流転する……

（うぁー、なんつー長い話だっ★）

# 『　鋭 ・ その後　』　（中三、とノートの表紙に書いてある☆）

『　鋭 ・ その後　』　（中三、とノートの表紙に書いてある☆）
2006年7月27日 連載（2周目・大地世界物語）

鋭はマーシャたちの結婚式の後、不老長寿となる「命の山」の「火の水」の入ったガラス壜を受け、エルシャマーリャから次元航海理論の記されたオリハルコンの記録器（テープ）をあずかって地球に帰ります。
「火の水」によって年をとらなくなった鋭は人民戦線に加って戦争回避と歴史的文化の保存につとめる一方（この時期、かの朝日ヶ森学園は一つの学園国家として人民戦線の根城になっています……これがのちのアロウ・スクールです）、記録器（テープ）の解読につとめ、遂に次元移送機を造りあげて再びダレムアスの大地に立ちます。
　しかしそこにはかつての面影はありません。
ボルドム軍との最後の決戦は、ボルドムの地を破壊すると共に
ダレムアスにも衰弱をもたらしたのです。
「命の山」はもはや息絶え、「火の水」の減少によりダレムアトの平均寿命はいちじるしく短くなりました。
　しかも決戦の際に多くの「力有る者」が死に、仮に生き残っていたとしても　すでに聖霊自体の命数がつきようとしていたのです。
　ダレムアスはもってあと1000年、生存可能なのはせいぜい100年くらいでしょう。
賢者団は鋭と人民戦線に救いを求めました。鋭と次元科学者・宇宙航海学者たちは必死になって "ダレムアスの箱船（ノア）" たるフェアリスティラーヤを造ります。……間にあうでしょうか?!
　その間にも地球の状態は悪化し、最終戦争となってしまいました。
ダレムアト（エルシャマーリャ）の一部が自ら希望して「兄弟世界の復興」のために地球に残ります。
　また、幾隻ものフェアリスティラーヤが広い宇宙空間に飛びたち、あるものは別の惑星、またあるものは異次元へ、そして船のままさまよう者など（「白い砂漠の星」のマリアマースの母親の船もその一隻）、ダレムアスの末もちりぢりになるのですが、……ボルドムの生き残りがやはり恨みからそれを追っているのです。（小六の時の「話」のノート参照）
　不老不死の孤独に耐え切れなくなった鋭も共に旅出ち、銀河の星のあちこちを転々としていますが、どこにも落ち着くことはできません。
……地球がすっかり冷え、あとはただ凍りついたままくだけるのを待っている……そんな時に帰って来て砂の上をさ迷い、眠りにつこうとします。
　すると、もう一人の長寿人が遠くから現れました。
　「……やあ。君もかい？」「うん」
心の行き場、愛する相手を失った長寿人たちはこうして一人一人消えてゆくしかないのです。

# 『　（無題）　』　（@中学2年～高校2年のどのへん……？？）

『　（無題）　』　（@中学2年～高校2年のどのへん……？？）
2006年7月26日 連載（2周目・大地世界物語） コメント (1)

「……なんのために、闘っているのだろう。」
そんなある日、死者の埋葬の終わらぬ草原を見渡しながら、リレク・イス参謀はぽつりと呟やいた。
「なんのため？　おいおい、人死にを見て弱気になっているわけじゃあるまいな」
将軍マダロ・シャサが言う。
「鋭はどうしてもそういった事を考えてしまう質（たち）なのよ。あなたより、少ぅしばかり思慮が深くできているのね」
人の脂に鈍った刃を自らとぐ手を休めて皇女は茶々を入れた。
「力押しの能なし将軍ですいませんなァ、陛下」

皇女とそれにつき従う腹心の参謀とが陣の内を連れだって歩いている。
軍議も既にとどこおりなく終了し、夕闇の中、野営の仕度の騒しさに紛れる、しばしの静寂。……やがて、ことさらに沈黙を破るという風でもなしに、リレキスは云った。
「別に、ダレムアトがボルドム軍をたおすことに関してどうこう言うわけではないよ、念のため」
「判っているわ。仮に、責められたとしたって今更わたしは何とも思わないでしょうしね」

「人が、生ける者が、何の為に相争うのか……そんな巨大な命題は、今のわたしにはどうでも構わない事だわ。多くの人の血を流させて、その罪と矛盾性を確かに自覚しつつもちこたえるだけの強さも、あるつもりだし。
深遠な哲学など無用よ。戦って勝つ。大地の民のために大地をとりかえす。
……正義だとか、権利だとか、そんな大義名分も要らないし、まして信じてもいないわ。
わたしはわたしの民の……いいえ、わたし自身が生きのびるために、毎日毎日闘かっては相手をたおしていくんだわ。この手をどっぷり血に染めてもね。どんな罪の意識に耐えてでも、何があろうとも、わたしは生きていることが好きだから、生きていたいから。……
これが、唯一の殺人の正当性ではなくて？」
「そうだね」
適確な殺人指令を下す参謀は静かに微笑して肯いた。皇女は嘆息する。
「あなたには、こういう考え方が出来ないんだわね。本当に何故かしら。
わたし達、お互いの事なら全て解っている。かなり近しい魂を持っている筈なのに……、視ているもの、生きている世界が、まるっきり別なのだわね。」

長戦のさなかの、おだやかな夕暮れの一情景である。皇女も、リレキス自身も、彼の目が近頃しばしば空の彼方や心の深みに向けられてしまっている事実に、気がついているのだった。

# メリー・ポピンズ笑うまで。　（高２くらいかな？）

スーパーカリフラエクスピックデリシャスドーシャス

スーパーカリフラエクスピックデリシャスドーシャス

ほら呼んでごらん　魔法の呪文

メリー・ポピンズ笑うまで

唱えてごらんスーパーカリフラ

魔法の言葉を　エクスピック

デリシャスドーシャス

デリシャスドーシャス

メリー・ポピンズ笑うまで。

これですね。（＾＾；）
　　↓
https://www.youtube.com/watch?v=mBqZT35qDic
Supercalifragilisticexpialidocious (Japanese)

https://www.youtube.com/watch?v=_fDiMtX8ykk
スーパーカリフラジリスティックエクスピアリドーシャス

ひありんぐ出来てないし！（＾■＾；）！

６／８

さらさらさら　さあらさら
砂の平原は鳴る
すでに海さえないのに。

還って来たのだと、鋭は感じている。

もはや流れすらないのに、

ここが故郷だったのだと…

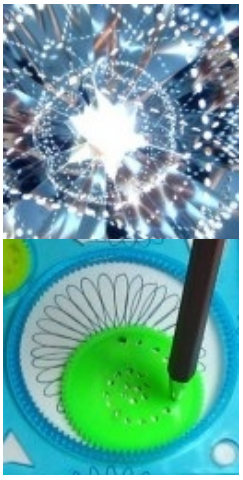
帰るべき所だったのだと。

グレートリープを乗り超えて、ひとつの宇宙史をまる二周？した清峰鋭くん？（**2016**年**3**月**25**日）

http://85358.diarynote.jp/201603251439421704/

# グレートリープを乗り超えて、ひとつの宇宙史をまる二周。

2016年3月25日 リステラス星圏史略　（創作）



https://www.youtube.com/watch?v=7AIsFOgCLPw&ebc=ANyPxKp3J3RjjuPzrjbD_msIMPgxIF1kr1Wc5kz3q5MUqzfGcGa6skVzyNYXkxrAs-ZANJ5W5unkJBzw41Qf45P--q1QLCesBQ
ヒルクライム - 想送歌（写真 teaser）

はい再びＰＣ前に戻って参りました。
１４：１４。
札幌は気温プラス４℃ありますが、
現在、北風とともにちょっくら猛吹雪…
降るはしから溶けていきます。

ご飯たべて昼寝して仕切り直しです。
短時間なのに超深く爆睡しているあいだに…

グレートリープを乗り超えて、
ひとつの宇宙史をまる二周？した清峰鋭くん？が、
ようやく自分の立ち位置の全体像を把握して、
若い神々のひとりとして再覚醒して…

眼を開けたら、先に起きてた「私」が覗きこんでる顔が見えましたよ。

…という、超絶ハッピーエンドしーんの夢を視てました…ｗｗｗ

https://www.youtube.com/watch?v=_k86if3Ao0A&ebc=ANyPxKqWJ4QNdOTWiUGyE5DFJ-hnG5iqpMqv8jeRFcdZDyHimsYKwdJiyZNyn7Y_Z0sXFyVmgQTBc_qJ5u8AQML1OiICvDU0NQ
ヒルクライム - 大丈夫

『リステラス』って、まったくの想定外でしたが、
けっきょく「壮大なる痴話喧嘩」の話。（＾＾；）

…だったんですね…（ちょっと違？）

ま、いいか…ギリシャ神話だって北欧神話だって、主神の夫婦喧嘩は凄まじいエピソードを残しているし…ｗ（＾＾；）ｗ

日本神話に至っては、子ヅクリに際して女性上位はいかんかった…ｗ（＾＾；）ｗとかいうところから始まっているしなぁ…☆

（あれは日本列島の先住民の『母系制』社会の性愛習慣を否定したエピソード。
→その後、男系専制階級社会「天皇制」に以降…だと思うんですが…たぶん、合ってるよね？）

閑話休題。

そんなわけで、八の字にばらけた時空世界は８の字に丸めなおされなだめすかされて、【∞】の形に戻ってこれから、二重螺旋の永遠無窮自動回帰式発動ゼンマイに戻りましたよ。と…☆

…♪（＾◇＾；）♪…

https://www.youtube.com/watch?v=RWYXOZ1Lp_g&ebc=ANyPxKqWJ4QNdOTWiUGyE5DFJ-hnG5iqpMqv8jeRFcdZDyHimsYKwdJiyZNyn7Y_Z0sXFyVmgQTBc_qJ5u8AQML1OiICvDU0NQ
ヒルクライム　友よ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

https://www.youtube.com/watch?v=3gVO3TI6NB8&ebc=ANyPxKoDbPCWbrcbzQEHvR9pV8V6ohcd7idvrdf_a15wJz4DpTcu4ZL5xJeQM4xQ3-Fi_aACbUcINhvBQtQIJwsYp6bvFJrSug
ヒルクライム - ルーズリーフ

…さて…（＾＾；）…☆

原稿！

午前中の作業と、いま視た夢で…

http://85358.diarynote.jp/201603111952261334/
（非⇒公開１）／『山百合と銀の楡』 ｂｙ 紅実真紅。

http://85358.diarynote.jp/201603171448407245
（非⇒公開　２）／『山百合と銀の楡』 ｂｙ 紅実真紅。

http://85358.diarynote.jp/201603171524509076/
【おちふね山 考】　（＋何曲か。）
（＋非⇒公開３／『山百合と銀の楡』 ｂｙ 紅実真紅。）

…の３つは、とりあえず「没あんど公開化」決定…。

（＾＾；）

これやっぱりこのまんまじゃ投稿用に使えない…☆

整理しなおして、投稿寸前？になったら、一旦「公開中止」にするということで…

（で、講談社さんで没られたら、また公開。）

（＾＾；）

https://www.youtube.com/watch?v=lhQFnaRqheU&ebc=ANyPxKp3J3RjjuPzrjbD_msIMPgxIF1kr1Wc5kz3q5MUqzfGcGa6skVzyNYXkxrAs-ZANJ5W5unkJBzw41Qf45P--q1QLCesBQ
ヒルクライム - ジグソーパズル

…ほんと、おもしろいくらい「偶然」「ぴったり」の曲が見つかるなぁ…ｗｗｗ

https://www.youtube.com/watch?v=pQci6zIl3x8&ebc=ANyPxKrfhHJH16NgswWJdVniUywG8bCIGH-2ShHpEiYXpjZdUYgLArYa1gxZPcmcO74sXNO3kw1OjQ6lt6G_01O-SkTw_BoTZQ
ヒルクライム - パーソナルCOLOR

実はまさかの狼さん（ペナルティ周回増量）仮説…(・ω・;)(;・ω・)　（2016年3月24日）

http://85358.diarynote.jp/201603241229303123/

# 個人的_超驚愕(￣○￣;)。

2016年3月24日 リステラス星圏史略　（創作） コメント (2)

清峰鋭クン
実はまさかの
狼さん（ペナルティ周回増量）
仮説…(・ω・;)(;・ω・)

…そおいえば、
「本来ありえないはずの
　特殊な器」シリーズだ。なぁ…！(￣○￣;)！…

（ぃや全く！思いつきませんでした…(・ω・;)(;・ω・)…）

## コメント

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）
2016年3月24日12:40

それにつけても本来「乗り鉄」の私を来る度に不愉快にさせるＪＲ白石駅って…(-"-;)…

なんか憑いてんじゃないのか？

事故死させられたお嬢さんか？

はたまた、旧国鉄労組の、退職強要ノイローゼ自殺とか、輩出してんのか…？(-"-;)？…

[霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）](#)

2016年3月24日12:50

曇っているのに異様に強い紫外線だか電磁波放射線だか。
(∋_∈)

わかった、白石駅、千歳空港線からの乗り換え客で、
通路の線量が高い…(-"-;)…

# 『　ゆうれい荘　漫画図書室　宇宙人墜落奇譚　』　（たぶん高校）

『　ゆうれい荘　漫画図書室　宇宙人墜落奇譚　』　（たぶん高校）
2016年8月31日 リステラス星圏史略　（創作）

（不思議の旅人物語）

『　ゆうれい荘　漫画図書室　宇宙人墜落奇譚　』

主人公・あたし＝　緑野　松子

主要登場人物　＝　清峰　鋭　＆　謎の宇宙人

その他　＝　弟（緑野のはら）、オヤジ様、オフクロ殿、友人ども。
コロ・ポックル（犬）

地球と火星に衝突の可能性:【どうでもいいが、地球は紀元44世紀にはもう人類がいないので、問題ない】。

---

http://85358.diarynote.jp/201705241005125682/
【磁気嵐スパイラル】／欠測と真っ赤と…／数日後、磁気嵐か？／【地殻 変動】警戒週間だね。
2017年5月24日 リステラス星圏史略　（創作）

> 中津川　昴 @subaru2012 · 11時間11時間前
> 終末に備える種子貯蔵庫、地球温暖化で浸水しかける（ギズモード・ジャパン） - Yahoo!ニュース https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20170523-00010012-giz-prod …
> 【水没しても凍るから大丈夫】
>
> ビルケランドII世 @Birkeland2nd · 14時間14時間前
> 返信先: @Birkeland2ndさん
> 太陽フィラメントとは太陽圏外磁場の磁力線ではなかろうかとオカルトチックに思いをはせています。
> 今現在太陽圏は銀河磁場に衝突しておりその為に銀河磁場の磁力線が太陽にまで侵入しているのかもしれません。
> 太陽フィラメントとは太陽に侵入した銀河磁場の磁力線なのかもしれません。
> https://pbs.twimg.com/media/DAhWAjcW0AIjXry.jpg

https://www.youtube.com/watch?v=PsML7ciMleQ
進撃の巨人 ED great escape　フル

> 中津川　昴 @subaru2012 · 2時間2時間前
> 【どうでもいいが、地球は紀元44世紀にはもう人類がいないので、問題ない】
> 地球と火星に衝突の可能性:
> https://t.co/34sv7z8aOB

…例によって、「ネタ」に続いた…ｗｗｗ

⇒http://p.booklog.jp/book/104348/read

リステラス星圏史略　古資料ファイル
３－３－０　（清峰 鋭 の 物語）

…【赤く乾いた星】に呑みこまれる…イメージは、

【太陽が赤色矮星化】するほど先の話じゃなくて、

「わずか」２３世紀後？の、ことだったのね…ｗｗｗ

（計算、合ってしまった…!!!!）

（いま気が付いたが、私がここで拾い集めているデータ群がつまり、

ソレル女史（＝ウェイファン）がこだわる「総合科学」分野か…ｗ

中津川　昴 @subaru2012 · 5月23日
田芋の株（一株10本）の根を四方で切って、泥を落としてから畔に持ち上げて、引きずりながら、引越し先の水田4号に入れたんだけど、さすがに40kgサイズは尋常でない重さ。深さ40cmの水田に差し入れても、葉っぱは僕の背丈を越えるほど成長しているのがすごい。土を藁と水を入れた。

↑
…こんな生活がしたいなぁ…（切に…！）

…てか、この人、ディマントイド兄様？

…とかだったり、しないか…？？

絶対！　ｗ（＾◇＾；）ｗ　他人じゃないッ！！

https://www.youtube.com/watch?v=k3ZD0zCIECQ
白虎野の娘 by Susumu Hirasawa

清峰鋭くんが脱走したのが今日ですか…？　（**2013年10月12日0:30**）

http://85358.diarynote.jp/201310112314562023/

# 注意警戒！

2013年10月11日 ヒロシマ＋ナガサキ＜フクシマ＝【 地球 】 !! コメント (13)

22時44分、福岡、玄海原発直下地震。

22時55分、宮崎、宮城、同時発震。

何かおかしい！注意！

前項コメント末尾も参照。

編集する

## コメント

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2013年10月12日0:30

…１０月の北海道の真夜中に遠雷って何事？

清峰鋭くんが脱走したのが今日ですか…？

ヽ（・＿・；）ノ

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2013年10月12日0:36

北海道 共和町 ０.０４２μ。

…マジで鋭の脱走？

したらこのあと本州大荒れ？

…別件で、日本地図見た瞬間、中部地域に巨大な円型が出来てて「ぐれんと」回転するのが視えちゃいました…

私が正気じゃないのか、世界と歴史が狂っているのか…

どっちだ？？

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2013年10月12日0:37

とりあえず札幌は大雨。

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2013年10月12日0:46

空中線量０.１４μとか０表示とか変な情報が乱立している奈良でいま大雨？だとか緊急地震速報震度７警戒とか書いてるツイがあったのは何かの間違いなのか…？

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2013年10月12日0:51

とりあえず10月11日に世界でＭ５地震がたくさんあった。のはたんなる事実。

頼むから私を眠らせて下さい…

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2013年10月12日1:44

石川県の線量異常はポストが産廃のそば。と判明。
新潟の廃車工場と同パタと判れば少し安堵するが、長野は説明つかないし、奈良の表示異常も再発。

先日の地震の緊急速報が「嘘だったってのが嘘だった」りしたらどうしよう…

最終兵器彼女の世界だな…

(-.-;)

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2013年10月12日2:26

ちなみに昨日、福島県の羽鳥は、一時、２８０μまで、上がっていたらしいです…

即死レベル？

で、現在、再発の兆候が見られるとかないとか…

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2013年10月12日2:30

羽鳥！

磯原だの羽鳥だの土岐だの高遠だのダブル大野（≒大熊）だの共和だのソウヨウだの、アルバだのタウレだの…ッ

予知夢に出まくってた地名ばっかり出て来んな〜っっっ！

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2013年10月12日2:37

イワキの線量がトンでもない。

グラフで吐き気がする。

全国に波及中。

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2013年10月12日3:20

02時43分、茨城県震度４。

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2013年10月12日3:28

「柏は放射線管理区域！」

じゃあ宮城県は？
すでに閉鎖済みの区域？

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2013年10月12日5:00

札幌、突風到達。

頼むから眠らせてくれぇ〜っ

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）
2013年10月12日10:32

うわ！(ToT)

震源地
「アメリカ合衆国ユーリカ」
なんて地名まで出てきた…
(・_・;)

予知夢の中では「ユーサリカ」。

崩壊分裂後の北米国家群のうちの一つの首都になるところ…

http://85358.diarynote.jp/201310130234316686/

# 「被曝スリッパ」。

2013年10月13日 リステラス星圏史略　（創作） コメント (1)

標記タイトルにてツイッタ検索どうぞ？

個人的に問題なのは、これとそっくりなのが「デモンサード」（ＤIII）大量ジュウタン爆撃散布の結果として砂漠化されたかつてのオアシスに散乱しまくっていた映像を、作中では磯原岳人の写真として、

まさに「見覚えがありすぎる」と、思ってしまった自分だ…

。。。(〃＿＿)σ‖

編集する

## コメント

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）
2013年10月13日2:36

北海道泊村 ０.０４７μ、
静岡県御前崎市 ０.０５７μ。

# …【赤く乾いた星】に呑みこまれる…　（2017年５月24日）

https://85358.diarynote.jp/201705241005125682/

https://www.youtube.com/watch?v=PsML7ciMleQ
進撃の巨人 ED great escape　フル

中津川　昴 @subaru2012・2時間2時間前
【どうでもいいが、地球は紀元44世紀にはもう人類がいないので、問題ない】
地球と火星に衝突の可能性:
https://t.co/34sv7z8aOB

…例によって、「ネタ」に続いた…ｗｗｗ

⇒http://p.booklog.jp/book/104348/read
　リステラス星圏史略　古資料ファイル
　３－３－０　（清峰 鋭 の 物語）

…【赤く乾いた星】に呑みこまれる…イメージは、

【太陽が赤色矮星化】するほど先の話じゃなくて、

「わずか」２３世紀後？の、ことだったのね…ｗｗｗ

（計算、合ってしまった…!!!!）

（いま気が付いたが、私がここで拾い集めているデータ群がつまり、

　ソレル女史（＝ウェイファン）がこだわる「総合科学」分野か…ｗ

中津川　昴 @subaru2012・5月23日
田芋の株（一株10本）の根を四方で切って、泥を落としてから畔に持ち上げて、引きずりながら、引越し先の水田4号に入れたんだけど、さすがに40kgサイズは尋常でない重さ。深さ40cmの水田に差し入れても、葉っぱは僕の背丈を越えるほど成長しているのがすごい。土を藁と水を入れた。

↑
…こんな生活がしたいなぁ…（切に…！）

…てか、この人、ディマントイド兄様？

…とかだったり、しないか…？？

絶対！　ｗ（＾◇＾；）ｗ　他人じゃないッ！！

https://www.youtube.com/watch?v=k3ZD0zCIECQ
白虎野の娘 by Susumu Hirasawa

# リステラス星圏史略
# 古資料ファイル
# ３－３－０
# （清峰 鋭 の 物語）

http://p.booklog.jp/book/104348

著者：霧樹里守 is 土岐真扉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/104348

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/104348

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ